

# 幻の町

## 第1部 過去の街

### 1 見続ける夢

ずっと前、たぶん幼稚園児だった頃から後厄の現在まで時々見る夢を紹介いたしましょう。

その夢は、3~4歳位の私が右手に戦隊ヒーローのお面を持ち、左手を「知らないおばさん」に引かれて、坂道を登って行くところから始まります。

途中、横見をしておばさんの顔を見たいのですがいのですが、強い空気圧が左頬にかかっている首が全く回らず見ることができません。

やがて、まわりが薄暗くなると「おばさん」の姿が消え、坂の上に両手で顔を覆った「別の知らないおばさん」が現れ、ゆっくりとこちらに下って来ます。

私は恐怖で総毛立ち、一刻も早く逃げようと思いますが、金縛りに遭ったように体はまったく動きません。

「別のおばさん」の歩みはゆっくりですが、着実に距離を縮め、ついに目の前に迫り、恐怖が頂点に達した時「はっ」と目が覚めるのです。

最初に見た時は全身に冷や汗をかきましたが、何度も同じ夢を見るうちに、慣れてしまい恐怖感は減少していきました。

### 2 別の夢

ところが、一週間ほど前から「別の夢」を見るようになりました。

「前夢と同じ年頃の私」は「前夢に出てきた知らないおばさん」と山岳電車の「山合いの駅」で電車を降り、左手を引かれ、右手に「前夢」と同じ「戦隊ヒーローのお面」を持ち改札を出て「前夢とは別の坂道」を登って行くのですが・・・。

前夢同様、左頬にかかる空気圧のため、横見が出来ず、おばさんの顔は分かりませんが、手の感触は「前のおばさん」と全く一緒・・・。

店の前に墓石が並ぶ石材店を過ぎると、道は細くなり、やがて舗装がない山道に変じた頃、坂の頂上が見えてきて、登り切ると、広い道との交差点がありますが、おばさんは私を連れて、道脇の窪地から向こう側に抜ける高さが1.4mほどの小さなトンネルに腰を屈めて入ろうとした途端・・・目が覚めるのです。

### 3 技術課長

さて、なんでそんな夢を見るようになったか？その原因らしい出来事が、初めて夢を見た日の日誌に記されていました。

5月10日(水)

- ・14:00 営業所長同行で「北米機械」へ。
- ・社長から新規プロジェクト担当だと紹介された40代と思われる新任女性技術課長と名刺を交わすが、その際、握手を求められた。その時の手の感触が「夢で手を引く知らないおばさん」に似ていてびっくり。
- ・課長は当社技術スタッフの所持する国家資格やスキルアップ研修について矢継ぎ早に質問。
- ・仕事には厳しそう？

顧客から握手を求められたことは初めてでしたが、課長はアメリカ生まれということなので、彼地の習慣が出たのでしょうか。

手の感触は「夢のおばさん」に驚くほど似ていたもので、思わず目を見開いてしまい「なにか？」と問われたので、慌てて「握手に慣れていないもので」とごまかしました。

「おばさんに似た手の感触」が私の潜在意識の奥底に死蔵されていた記憶を呼び覚まし「別の夢」を見るようになったのか？

いや、課長はどう見ても30代で「幼少期の私」の手を引く「おばさん」とは、年代が合わない・・・しかし課長が「おばさん」の娘だったら、手の感触も似ているのかもしれないけど？

あの日から食事中も、テレビを見ていてもそのことが気になってしかたがありません。

「別の夢」を見始めてから「前夢」は全く見なくなったのも不思議です。

ところで「前夢の場所」の記憶は、全くないのですが「別の夢に出て来る山合いの駅」は営業で「港(みなと)市」に行った時、よく乗った山岳電車沿線の駅にそっくりなので、

「そこで降りて、坂道を小さなトンネルまで登れば、夢の続きが分かるかもしれない」という思いが高じて、重い腰を上げ、現地を訪れることにしました。

#### 4 山岳電車

5月中旬の日曜日の午後「浪速市内」の私鉄最寄駅から「白鷺市行特急」に乗車、港市にある「乗換駅」の「地下二階ホーム」で降車し、階段を登って「地下一階」の「山岳電車ホーム」に出たのですが、なぜか景色に違和感があり、足元のふらつきも感じます。

その原因が分からないまま構内の「立喰蕎麦屋」の前を通り、頭端式ホーム三線にそれぞれ停まっている電車を見ると、何れも40年以上前に製造された古い車両。

「山岳電車」は物持ちがよく、高齢車両も大事に使っているので「40年選手」が走っていることに不思議はないのですが、3本揃っていることは珍しく、

「今日はオールド・トレイン・デイなの・・・」

つぶやきながら、左端のホームから「東播磨行各停(三両編成)」の二両目に乗込み、進行方向に向かって左側のベンチシートの座り、周りを見ると、床や壁の汚れがありません。シートも痛んでいないのはリニューアルされているからでしょう。

天井を見ると子供の頃、テレビコマーシャルで見た精神科医院の吊広告が下がっていたので、思わず、

「へーあの医院、まだ、あったんや」

と、声が出てしまい「誰かに聞こえたかもしれない」という恥ずかしさで、周りを見回しましたが、乗客の姿はなく、前後の車両も無人です。

それからすぐに発車ベルが鳴り、動き出した「乗客1名の電車」は、北へ向って進行し始めましたが、次の駅でも乗客なしで出発、しばらく走ってトンネルを出ると、モーター音を響かせて市街地の北にそびえる山脈を刻まれた急坂を登り、下車駅一つ手前の駅に着きました。しかし、ここでも乗客はありません。

ただ・・・後ろに視線を感じたので、振返ると母子が改札外で電車を見ているのが目に留まりました。

・・・が、改札に入ることはなく、電車はゆっくりと発車、50パーミルの急坂を登り、トンネルを抜け「山合いの駅」に到着したので、

#### 5 小さなトンネル

電車を降り、無人改札から外に出ると、空は藍に近い深い青色で、初夏とは思えないほど空気が澄んでいます。

しかし、得体のしれない違和感が乗換駅からずっと続いていて「これは先には厄災が待ち構えていることの前感かもしれない」という不安も湧いてくるのですが、意を決して、駅前から西に延びる坂道を登り始めました。

しばらく進むと道沿いに石材店があり、登るにつれて道が細くなるのは夢の通りで、坂道を登りきると、導水管を利用した小さなトンネルが道脇を窪地に間違いなくあります！！

トンネル入り口の高さは夢の通り1.3~1.4m位、暗い坑内を覗くと、途中で右側に湾曲しているせいか、向こう側が全然見えません。

たちまち全身に寒気を覚え、

「もしかしたら途中でマムシがとぐろを巻いて待ち構えているかも？向こうまで行くと崖があり、足を滑らせて、転落してしまうかも？」

悪い想像ばかりが湧き上がり、しばらく逡巡していましたが・・・、

「トンネルをくぐらなければ夢の続きは分からない。行こう！」

勇気を奮い起こし、腰を屈めて入るとトンネルの壁には暗い蛍光灯の照明があり、路面は雨が流れ込んだのか湿っています。

恐る恐る進み、右に曲ると、出口から青空だけが見えました。

マムシはいませんでした、出た途端、崖から転落する危険性はまだ残っています。

私はこぶしを握りしめ、心の中で、

「勇気だ！！」

と叫び、己を鼓舞するために「一二三四五・・・」と歩数を数えながら歩み、出口にたどり着くと、青空に身をゆだねるように飛び出しました。

## 6 トンネルの向こう

そこに切り立った崖はなく、目に飛び込んできたのは、川上、川下が窄まり中程が袋状に大きく膨らむ谷間で、手前の斜面は「トンネル出口の高さからから谷底」まで、向かい側は「谷底からこちらよりはるかに高い山の中腹」まで家がびっしりと覆い、川下の狭間から海が見えています。

人里離れた山奥の狭いトンネルの先に数千人規模の大きな町が隠れていたことは驚くべきことですが、港市の南部のように片側に山がある斜面地形と違い、手前も向こうにも斜面なので、見ていると平衡感覚がおかしくなり、乗換駅から続く違和感も相まって、足元がますますおぼつかなくなってきたので、足踏みして、しっかり立っているかを確認してから、町を見下ろすと、学校らしい4階建てのビルディングと屋上に「たすけあいマーケット」という大きな看板を挙げた3階建ての店舗以外は、全て平屋か2階建です。

この町は山奥にあるため、人の往来が少なく、昭和のどこかで発展が停まってしまったのか？

そんなことを考えながら、谷底に下る道に目を向けると・・・道の端にマラソンで選手がコースから外れないように導く「白線」が路面から浮き出るように現れ、同時に線に従って道を歩むように強制する強い力を感じました！！

## 7 パラレルワールド

この異常な状況は、明らかに現実ではありません。

では、夢なのか？

いや違います。夢の景色はあいまいで、ぼんやりしていますが、眼前の光景は「ブレ」や「にじみ」がなくはっきりしていて、風も感じるし、アスファルトや土の臭いもします。

信じられないことですが、もしかしたらSFに現れるパラレルワールドに迷い込んだのかもしれない。

・・・と、考える間もなく強い力のため、留まることが困難になり、遂に一步踏み出すと、その後は、足が勝手に動き出し「白線」を踏んで坂道を下り始めました！

「これは、逆らうことのできない運命になのか、もう仕方がないのか」と諦めて、通りを下って行きましたが、人影はなく、道沿いの小さな雑貨屋の扉は空いていて商品の陳列もあるのに店員はいません。

しかし、草花のプランターや植木鉢を外に並べている家や、ベランダに洗濯ものを干している家があり、人の暮らしがあることは確かです。

## 8 小学校

・・・数分歩いて、谷底にたどり着くと小さな川にコンクリート製の橋が架かっていました。

そこから坂の上にある学校らしいビルディングを見上げると小学生が校庭を囲む金網にもたれてこちらを見下ろしています。

校舎の窓からも歩いたり、手を上げたりして動いている子供たちの姿が見えたので、

「パラレルワールドにも人はいた」

少しほっとしながらも、相変わらず強い力の導きで白線を辿って、橋を渡り、左折し、川沿の道を進みトンネル出口から見えた大型店舗「たすけあいマーケット」前に到着するとそこには市バスのバス停が！！

この町と港市中心部を結ぶのは電車だけとと思っていましたが、バス路線があったのです。

確かに、ここから坂道を登り、トンネルを潜って「山合の駅」まで行くより、バス停から南の市中心部まで行く方が便利なので、住民の多くはこちらを利用しているはずです。

と、納得したところに丁度下からバスが登って来ました。そのバスの車体カラーは濃い緑色でゴーゴーと大きなエンジン音を出し、黒煙を吐きながら走る姿は、間違いなく私が子供の頃のそれです。

## 9 過去の街

車内に数人の乗客がいましたが、バス停は通過、その先で左折し視界から消えました。

このバスを見て、私は子供時代の町にタイムスリップしたことを確信しました！！

乗換駅で感じた違和感は、そこがすでに「過去の駅」だったことが原因でした。

「立喰蕎麦屋」は、今の場所と違っていたし、ホームに並んでいた電車も「内装がリニューアルされた古参兵」ではなく「出来立ての新車」で、吊広告もリアルタイム。

「山合の駅」も「高いビルのほとんどない町」も全て過去の世界です。

突然過去の世界にテレポートしたという異常な状況下なのに現状をはっきり認識したことで、明るい気分になると、ずっと感じていた違和感も嘘のように消え「道沿いの散髪屋、てんぷら屋には営業中の札が下げられているから、客はいるのかな？ ドアを開けてみたいかな？」

好奇心から中を覗こうとするのですが、規制が働き、足を白線から逸脱させることはできません・・・私に街を探索する自由はないようです。

しかたなく引力に任せて、街の南まで来ると、道は西に曲がり、小さな峠を登りきったところに「タバコ屋のある三叉路」があり、その少し下のバス停の手前から分岐し、左手の高台に登る坂道を見た時、おもわず「あっ」と声が出ました。

まさにこれこそ最初の夢に出てきた坂道だったのです。

## 10 最初の夢の坂道

夢の中では左から空気圧があり、前しか見ることができなかったのですが、目の前の道は、高台に上がるために崖を開削して造られたものらしく、左側は擁壁、右側は転落防止のガードレールがあります。

「別の知らないおばさん」が現れた坂の頂上には、正面にコンクリート塀があり、庭の木立がその上に顔を出していました。

そして、なんと白線は坂の頂上に続いています！！

「頂上におばさんが現れるかもしれない」

という、恐怖感から足を踏ん張って歩みを止めようとしたのですが、どんどん強くなった引力に引きずられるようにして坂の上まで引っ張り上げられました。

## 11 坂の上の家

・・・幸いなことに、おばさんは現れませんでした。

緊張感が解けて全身の力が抜け、しゃがみ込みそうになった私を無慈悲な引力は、容赦せず、今までの街並みと違い大きな家が立ち並ぶ御屋敷街を白線に沿って、下界の町や海が見える高台端の生け垣に囲まれた庭のある洋館の門まで引っ張って行くと、白線はそこで90°曲がり、門柱を真っすぐに登って、呼び鈴の所で終わっています。

「押せということか・・・」

と、思う間もなく右手が吸い寄せられるように呼鈴まで伸び、人差し指が勝手にボタンを押すと・・・門扉と建物の入口ドアが揃って僅かに開きました。

「入れということか・・・」

私に逆らうすべはなく、門扉を開け、庭を通り、さらに入口ドアを開けて中に入ると、壁で囲まれた小さな部屋があり、奥の「両開きのドア」の開閉部に少し隙間があります。

一々考え、判断することに疲れていたもので、流れのままドアを開けて入ると「グランドピアノが半分のス

ペースを占める小さな舞台」と「椅子が横十脚、縦五列程並ぶフロアー」からなる小規模な音楽ホールがありました。

## 12 (その2)との話(1)

・・1分も経たない内に舞台奥から靴音が聞こえ、白いシャツを着て、紺色のズボンをはき、戦隊ヒーローのお面をかぶった男性が袖から現れました。

舞台中央の階段を下りて、客席を進み、私の前で停まると、御辞儀をして、ゆっくりとお面を脱ぐと・・、

お面の下の顔はなんと「私」です！！

あまりのことに気が動転し、何か言わねばと思うのですが・・・鯉のように口をパクパクするばかりで声が全く出ません。

やがて深呼吸すれば落ち着くんじゃないかと思いつき、大きく息をすると・・何とか声が出たので尋ねました。

「・・あなたはもしかして、今まで会わなかった双子の兄弟ですか？」

・・・少し間をおいて、男は私とまったく同じ声で、

「いいえ、私は双子の兄弟ではありません。強いて言えばあなたの脳内記憶野に居るあなたのコピーのような存在です。ですから、まあ(私その2)略して(その2)とでも呼んでください」

「さて、なぜこんなわけのわからない者が眼前にいるのか、貴方も不安でしょう。どうぞ御座りになって、私の話をお聞き下さい」

(その2)は私に2列目の椅子に着席するよう促し、自分は1列目の椅子の向きを変え、向かい合わせに座りました。

「・・先ず、貴方の4歳以降のことから振り返りましょう。当時、貴方は南都市の祖父母の家で暮らしていました。そのころ父親は、普段家におらず、年数回、それも夜遅く、人目を忍ぶように帰って来て、未明には出ていったはずです。3年経ち、貴方が小学校に入る頃、貴方を引き取って、浪速市北郊の団地に移り住み、近くの商店街の洋品店で仕入れの仕事につきました。父親は貴方に母親は貴方の赤ん坊の頃亡くなったと言い、再婚もせず、貴方を育て、昨年80歳で亡くなりました・・」

「なんでそんなに詳しく知っているの？」

驚いて、その理由を聞こうとしましたが・・、

「私のコピーだから知っていて当たり前か・・」

と、発言を留まりました。

「・・さて、次に、記憶の仕組みのお話をいたしましょう。記憶の大半は忘却によって消滅し、一部だけ脳内に保管され、夢の材料になると言う人がいます。しかし、これは大きな間違いです。全ての記憶は、一日毎、あるいはイベント毎に分類され、脳内記憶野の資料箱に厳重に保管されています。その一部は箱から漏れ出し夢で再構成されますが、大半は死蔵され日の目を見ることはありません。しかし、貴方の場合、ほんの僅かな記憶の欠片が鍵となり、丁度40年前、1980年10月10日の資料箱の封印が解かれ、中身が一気に流れ出てきました。あなたはその鍵について思い当たることがありますね？」

## 13 (その2)との話(2)

「・・取引先の調査課長と握手した時の感触がそうでしょうか？」

(その2)は標準語でしゃべるので、私もつられて標準語で返してしまいました。

「そうです。その感触こそ封印を解く鍵となる記憶の欠片でした。そして今、甦った記憶に登場する40年前の町に来ていることにも気が付いていますね」

「はい。乗換駅が過去の駅で、電車もばりばりの新車で、この町も過去の町でしょう」

「そうです、本日、貴方は山合の駅で降り、知らないおばさんと登った坂を経て、トンネルを抜け、橋を渡り、別のおばさんと出会った坂道を通ってこの家に来ました・・これは、1980年10月10日貴方が通った

コースを辿ったものです」

「・・・・・・・・」

「ところで、実はこのコースには続きがあります・・貴方にはそのコースを進み、到着地点で起きる重要な出来事をしっかり見届けてもらいたいのです。ここから先は白線が出たり、引力が導いてくれることはないので、到着地点までの経路を記した地図を御渡しします。現地についたら崖際に立つ廃屋の庇の下で少しの間御待ち下さい」

そう言うと、経路が手書されたメモ用紙にくれました。私もようやく気持ちが落ち着き、心に余裕が生まれたのと、言われっぱなしで、少し腹が立ってきたこともあり、初めて質問しました。

「あなたは、当日の記憶を取り戻すために現地に行きたいという私の気持ちを見通した上で、地図を渡せば、間違いなくそこへ行くと思っているのでしょうか。本来、貴方は私と同一の存在なのに別の人格を持ち、道に白線を出したり、ここまで引張り寄せたりする神通力まで持っているのはなぜなのですか？教えてください」

(その2)は、それには答えず、

「・・40年前の今日の出来事は、貴方に精神構造を一時麻痺させるほどの強い衝撃を与えたため、貴方の脳は自衛本能を発揮し、その危険すぎる記憶を3歳までの思い出も道連れにして、脳内資料箱に厳重に封印しました」

「しかし、箱からわずかに漏れ出した記憶が、知らないお婆さんの夢となって、貴方を長年苦しめてきた・・また、貴方が何人もの女性と付き合いながら結婚に踏み切れないまま四十路を迎えたのも、件の記憶が女性に対する不安、忌避感を生み出したことが原因です」

「・・さて、もっといろいろなこと、例えば『(その2)がなぜ、貴方の眼前に出現したのか』などを御話したいのですが、残念ながらもう時間がありません。もし、娑婆でお会いすることがあれば、それらを申し上げることにいたしましょう。では、失礼します」

と、頭を下げ、くるりと後ろを向くと、足早に客席を進み、舞台に登り、袖に消えました。

#### 14 保護・逮捕

結局(その2)は、私の人格とは別の人格を持っている理由や「神通力」に関する質問には答えず、去りました。

私は、乗換駅以来、非日常的な状況に置かれ続けたため、精神的疲労は極限まで達し「もう成り行きに任せでいい」という投げやりな気持ちに支配されていたので、音楽ホールを出ると、地図に導かれるように「到着地点」を目指して歩み始め、御屋敷街を抜け、バス停前の県道を南に進み、三叉路の西側にある高台の急坂を登りきると平坦地に出ました。

ここは先ほどの街と違い、大きな家はなく、平坦地や高台周囲の斜面を削って造成されたテラスには小さな家や文化住宅が密集しています。

住宅街を貫く道を南に進むと高台端にある駐車場に着き、下を見下ろすと、斜面には、へばりつくように家が建ち、その下には斜面からせり出すコンクリートの土台があり、その上にも家が乗っています。

さらにその下は急峻な崖のよう見えたのですが、よく見ると斜面を削って造られた猫の額のような段々畑が谷底まで続いていました。

(その2)が言っていた駐車場の一隅にある廃屋の庇の下の古いベンチ座り、周囲を眺めると夕日が山の端に近づき、薄暮になりかけていて、時計を見てもう5時半です・・。

段々畑の様子をもう一度よく見ようと駐車場の端から身を乗り出して見下ろしたその時、後ろから微かに足音が聞こえてきました。

振り返ると、先ほど歩んできた道の遠くに人の姿が見え、近づくとつれて、その姿が大きくなると、子供を抱いた女性が、小走りにこちらに向かって来るのが分かり・・駐車場に入ってきた時、顔がはっきり見えました。

女性は「夢に出てくるおばさん」で、抱かされている子供は驚くべきことに「3歳時の私」です！！

初めて顔を見た「おばさん」はひどく怯えていて必死に足を動かしこちらに逃げて来ます。

慌てて廃屋の後ろに隠れ、顔を半分だけ出して様子を窺うと、おばさんの後ろから別の女性が速足で追いかけて来るのが見えました。

別の女性は、長い髪が顔に纏わりついているので、容貌は全く分かりませんが、二人の距離はどんどん詰まってきて、おばさんが私の目の前まで来た時は、追いつく寸前でした。

と、その時、駐車場の四方から男が6人飛び出してきました。そのうち3人は警官の制服を着て、あと3人はネクタイなしのワイシャツに黒いズボンをはいています。

制服警官は「3歳の私」を抱いたおばさん取り囲むと一人が、おばさんを子供ごと抱きかかえ「保護、保護！！」と大声で叫び、駐車場の東側に連れて行きました。

どうやら刑事らしい私服の3人は追いかけてきた女のもとに走り寄り「緊急逮捕、緊急逮捕！！」と叫び、取り囲もうとした瞬間、谷底から吹き上がってきた強風により髪が後ろに流れ、顔がはっきり分かりました。

## 15 昏倒

それは、なんと私の母です！！

母は、刑事達の叫び声を聞くと、目が吊り上がり、口は裂けるほど大きく開き、頬から耳の下にかけて深い皺が何本も浮かび上がる凶悪な鬼のような形相になり、取り囲もうとする刑事達を振り切って駐車場の西端から、斜面に飛び下りると、刑事たちもそれを追って次々に飛び降りたので、私も廃屋の後ろから走り出て駐車場の西端まで行き、下を見下ろすと母は家の脇にある細い道を抜け、段々畑の間を下る細いあぜ道をしばらく駆け下りたところで、前のめりに転倒し、でんぐり返しを打ちながら転がり落ちて行き、最初に飛び下りた刑事も同じところで転倒し、後を追うように転がり落ちて行きました。

私もたまたまに畦道に飛び降りると、不思議なことに着地したのに抵抗が全くありません。足は地面を通り越し、潜り込むように沈んでいくのです。

・・・しかし、腰まで沈んだところで、硬い岩盤にぶつかったような衝撃が足裏にあり、くるぶしと膝に激しい痛みを感じ、体が前に傾き、地上から30cm位まで倒れたところで、さらに不思議なことに「空間」に頭を激しく打ち付け、おでこに激しい痛みを感じ、目の前に火花のような閃光が走り、精神科医院の吊り広告が一瞬見えたのを最後に、周囲が真っ暗になり、私は意識を失いました。

## 16 病室(1)

・・・目が覚めるとベッドに横たわっていて、頭には鈍痛があり、左腕には点滴の針が刺さっています。

「どうやら病室にいるらしい」ことが分かったので、左右を見回すと、ベッドの右側の手すりにナースコールのコードボタンがあったので、押すとすぐに女性の看護師がやってきました。

「気づかれました。いますぐにドクターを呼んできます」

退出し、5分ほどすると若い医者がやって来たので、

「私はなんでここにいるんですか？」

問うと、それには答えず、

「昨日のことは覚えていませんか？」

と、聞き返します。

「・・・どうも、私は夢を見ていたみたいです。夢の最後で崖から飛び降り、空間に頭を打ち付け意識を失ったんですが、それから先のことは全く・・・」

「貴方は事故に遭いました。事故原因については、後ほど専門医の診察で御話があると思いますので、現在の体調についてだけお話しします。貴方は、高所から飛び降りて、着地した時に足首をひねり捻挫をし、また前頭部を壁に打ち付けたことにより、皮下血種いわゆるたんこぶが出来ました。当院に搬送され、足首のレントゲン、頭部のCT撮影をしましたが、骨に異常はなく、脳波検査も問題なし。たんこぶは貼り薬を処

方し、足首の捻挫もギプスでの固定は不要、湿布薬で対応できそうです」

医者は標準語で話し、ここで言葉を切ったので、

「あのう、私が気を失ったのは何時頃ですか？」

医者は少し考えた後、

「昨日の14時ごろです」

昨日の13時30分頃には乗換駅に着いていたはずで、それから30分後に事故に遭ったとすると、一体何処で事故に遭ったのか？

「事故現場はどこなんですか？」

医師は、それには答えず、

「起きられそうですか？」

と尋ねるので、ベットから起きて、床に立つと、医師は頷き、

「本日午後、診察を受けてもらいます。それから、明日、もう一度受診して、問題がなければ、退院できるでしょう。なお、視覚や聴覚に負担をかけないように、今日は読書やテレビはなしで御過ごしてください」

・・結局、私の質問には答えず、戻って行きました。

## 17 病室(2)

医者がいなくなると「今日・明日、休むことを会社に連絡しなければ」と、スマホを探しかけたのですが「5月の連休に休日出勤し、この月・火は代休を申請していた」ことを思い出し「たぶん明日には退院できるし、会社には事故のことは黙っていて、水曜日は何食わぬ顔で出勤しよう」決めて、連絡はやめました。

それにしても、私は父から「母は私が物心つく前に亡くなった」と聞いていて、そのことについて何の疑問も持たず、母の思い出も皆無だったのに、夢に出てきた母の顔を覚えていたのはなぜなのか？

(その2)が言っていたように「私の精神構造を麻痺させた出来事」とは「夢で示された母の犯罪」のことで、これが当日の記憶とそれ以前の記憶を封印してしまったのでしょうか？

しかし、母はなぜ髪を振り乱し、私とおばさんを全力で追いかけてきたのか？

おばさんもなんで必死に逃げるのか？

そもそも、母とおばさんはどういう関係なのか？

あれやこれやと考えているうちに、お昼になり、ベッドに昼食が届けられました。

丸一日、何も食べておらず空腹だったこともあり、むしゃむしゃと完食、おかわりが欲しいほどでした。

13:30になると朝とは違う女性の看護師が呼びに来て、

「移動するのに車椅子はいりますか？」

と聞くので、ベッドから降りて、立ち上がって見ると、ふらつきはなく、足首は少し痛かったのですが、歩けないほどではないので、車いすは断り、看護師の後をついて行き、精神科診察室前で停まり、ドアをノックして開けると、入るように言われたので、

## 18 診察(1)

白衣を着た男とスーツ姿の男が机に並んで座っていて、こちらを向いて黙礼しました。

白衣の男は、年齢は60代後半ぐらいの老人で、薄い白髪をかるうじて七三に分け、丸顔に柔和な笑みを浮かべながら、前の椅子に座るように促しました。

「精神科の大橋真次と申します。こちらは記録係の小田です」

あいさつの後、大橋医師はしばらく私を見つめてから・・・口を開きました。

「担当医から聞いていると思いますが、貴方は昨日14:00頃、市内で事故に遭遇し、怪我をしたため当院に搬送されました。事故の経緯については、後で御話しますが、まず、昨日の朝から貴方の記憶している限りのことを御話し下さい」

午前の医者と同じ標準語のアクセントです。

「・・・あの一、当日の記憶の中には、夢や妄想も混じっているようなんですが、御話ししてもよいのでし



ようか？」

恐る恐る尋ねると、医者は笑って、

「私は精神科医です。体験した夢、妄想、空想すべて御聞かせ下さい」

私を落ち着かせるように提案するので安心して、

「朝、浪速市内の家を出て最寄りの私鉄駅から白鷺市行特急に乗り、乗換駅で降りた途端、駅のどこかで眠ってしまい、乗換駅から電車に乗り、山間の駅に着き、そこから40年前に訪れた道を進み(その2)に会い、私の封印されていた記憶が握手することによって甦ったことを知らされ、渡された地図の示す場所に行き、そこで、自分を抱いたおばさんを追いかけてくる母と遭遇した夢を見て、斜面に飛び降りた母を追って自分も飛び込んだところ、足に怪我し、額を打って気絶し、気が付いたらここにいたこと」を長々と話しました。その間、医師は時々うなずきながら聞き、記録係はすごいスピードでノートパソコンのキータッチをしています。

ようやく話が終わると、

「貴方の足は、地面を突き破り、その下に隠されていった硬い岩盤にあたり、そのはずみで、体が前に傾き、頭を空間にぶつけて気絶したのは、間違いはないですか？」

と、質問するので、

「間違いありません。膝も頭も激痛が走ったのを覚えています・・・」

「・・・ところで、貴方は白鷺市行き特急の何両目のどの場所に座っておられたか、覚えていますか？」

「えーと・・・たしか・・・白鷺市側から数えて2両目右側で、中央ドア横の席だと思います」

「・・・それから、今日の事故の原因といいますか？疲れていたとか？当日や前日に何か前兆があったとか？気になっていたこと、記憶に残っていることはありませんか？」

そこで、私は「以前の夢」と「最近見始めた夢」を話しました。医師は、身を乗り出して頷きながら聞いていましたが、話が終わると、口を閉じて上を向き、しばらく考え事をしてから・・・、

「1回目の診察は、これで終わりにしましょう。貴方の御話を分析し、本日もう一度診察をして治療方針を決めます。次は外科で診察を受けてから病室にお戻り下さい。お大事に」

そう言って、微笑むと、外科までの経路を示したプリントをくれました。

## 19 診察(2)

外科の診察では、足と額の痛みの程度や、歩いたり、座ったりするときに支障はないかを聞かれ、足の湿布薬を塗り替えただけで終わり、病室に戻りました。

4時過ぎに診察室まで案内してくれた看護師が呼びに来たので、今度は一人で精神科診察室まで行き、ノックして入室すると、医師一人が一人でノートパソコンを前に座っていて、

「何度も来ていただいてありがとうございます・・・」

と礼を言い、向かいの椅子に座るように勧め、パソコン画面を見ながら話し始めました。

「・・・さて、まず、事故の概要をお話ししましょう。貴方は13時31分、白鷺市行急行で乗換駅に着いたのですが、電車を降りるとホームのベンチに座り、腕組みをしたまま居眠りを始めました。そして14時00分発の白鷺市行各停が出た直後の14:01分、急にベンチから立ち上がり、ホームの端まで行き、一度立ち止まってから、両足を縮めた不自然な姿勢で下に飛び降りしました。しかし、着地に失敗し、前に倒れ、壁面に頭を打ちつけて失神しました・・・ホームにいた駅員がすぐに転落に気づき、駅務室に連絡、信号を赤にして後続列車を止め、担架を線路に下して、貴方を救出したのですが、意識がないため、当病院に搬送されました。その後、現場では警察による実況見分が実施されました。以上のことはすべて駅ホームの監視カメラに映像データが保存されています・・・貴方が飛び降りてからホームに引き上げるまで5分もかからず、後続電車は15分後に到着予定だったので、接触事故は起きませんでした・・・ホームで貴方のすぐ近くにいた乗客が駅員に『自殺した人がいる』と告げたので、駅員も始めは自殺かと思ったそうですが、白鷺市行各停が出た直後に飛び込んでいることや、ホーム端まで行き、一旦停まり、線路面に降り立つような姿勢で飛び降りた

ことなど、自殺にしては不自然な点があり、疾病に伴う事故の可能性が高いと思ったそうです・・事故に関する駅員の報告は、救急隊→救急外来の医師→私と伝えられました」

「実際に貴方の話を御聞きしたところ、ホームからの飛び降りが『自殺』や『線路に降りて無理に電車を停めるといふ悪質な悪戯』とは思えません。睡眠時遊行症いわゆる夢遊病の可能性もあり、夢での行動がそのまま現実の行動につながることは認知症患者にも見られます・・」

「警察は、実況見分や貴方に対する事情聴取により、今回の事案が自殺か事故かを判断します。自殺となると電鉄会社に対する補償問題が生じ、事故になると病気が原因で意識を失いホームから落ちたのか？殺意を持った者が突き落としたのか？などを捜査することになります」

「以上、貴方の転落時の状況を御話ししました・・まあ、たんこぶは、凹んできたし、事故による精神的ダメージもほとんどありませんので、明日には退院できそうです。ただ、後日、警察署で事情聴取を受けることになります。犯人としての取り調べではなく、聞き取りなので御安心ください・・最後に貴方から聞きたいことはありますか？」

私は自分のとった不可解な行動が理解できず、思考が停止しまい、

「頭が混乱していて、今は何を質問していいかわかりません・・。」

と話す、医者は、私を安心させるように微笑んで、

「確かに夢の中だったとはいえ、実際の行動は普通ではありません。診療方針は明日の診察で御話しますので、今日は病室でゆっくりお休みください。お大事に・・」

それを聞き、私は立ち上がり、一礼して、診察室を出ました。

## 20 診察(3)

翌日は10時から診察があり、今後の診療方針として、

「夢が現実の行動に影響を及ぼすことがないようにカウンセリングや投薬治療を続けていくので、外科を受診した後、受付で退院手続きをして、来週初めに精神科外来に来て診察を受け、その後は月1回受診してください。必ず良くなりますよ・・」

笑顔で励まされたので、

「ずいぶん感じのいい医者だったな、今まであった医者の中で一番人格者だ」

と、明るい気持ちで退室、続けて受けた外科の診察では張り薬を交換しただけで、

「本院の診察は今回で終わり、事務所窓口で、退院の手続きをしてください」

とのこと、事務所窓口に行き退院手続きを始めると事務員から、

「警察署に電話するように連絡が来ています」

と、電話番号を書いたメモを渡され、また

「退院したら連絡してほしい」

趣旨の伝言が本社からあったことも告げられました。

昼過ぎには、手続きが済んだので、ロビーから警察署に連絡すると・・しばらくして刑事課の担当者につながり、

「出来れば明日14:00に警察に来ていただき、事故の御話をうかがいたい・・それから、事故原因をはっきりさせるために貴方が受診した医者の診断書を提出してもらおうがよろしいか？」

要望を全て諾って電話を切り、次に本社に電話すると受付がつないだのは、なんと副社長！

現社長の息子で、本社年頭式で見かけた記憶はありますが、話した記憶はありません。

副社長は、異常なほど丁寧な口調で、

「けがもひどくなく、早く退院できて良かったですね。もし差し付かえなければ、今日、病院近くにある港市の営業所で会いたいのですが、いかがでしょうか」

本来、今日は代休日ですが、予定もなかったもので、13:30に営業所で会う約束をし、歩いて病院近くの港市営業所に着くと、本社からは連絡済らしく、名前を告げただけで、会議室に通されました。

## 21 副社長

・・・30分ほどして副社長がやってきました。

緊張でこわばった表情ながら、非常に丁寧な口調で、

「ホームから転落されたそうで、心身ともにダメージを受けたでしょう。連休のイベントでかなり疲れてましたんか？」

と話しかけるので、

「いや、特に疲れていたわけではないんです。前の晩、夜更かしたせいなのか、駅で降りた時、眠気が来て、ホームのベンチに座って寝てしまったようです。起きた時にしっかり覚醒しておらず、足元がよろけて落ちたみたいです・・・」

「残業が続いて疲労がたまってたとか？」

「・・・」

やや気まずい沈黙の後、

「仕事疲れが原因で転落したこと」に固執している副社長に「40年前の夢を見て、それが原因で転落した」ことを話しても、理解してくれないと思い、

「・・・確かに昨年度は残業も多いし、疲れてましたが、今年度は、派遣の人も来てくれて、週のほとんどで定時退社できるようになり、残業も月10時間を切ってるし、疲れはありません。転落した原因は、居眠りして寝ぼけて、ベンチから立ち上がり、ふらついて落ちただけで、仕事上の疲労とは関係ありません」

この答えを聞き、ようやく緊張が緩んだようで、柔和な顔になり、

「一週間、特別休暇を出しますから十分休んで養生してください」

と、驚きの提案をします。

「そんな大げさな、ケガといってもたんこぶだけです。明日から普通に出勤しようと思っているのに・・・」

「いやいや、後遺症が出ることもあるし、本社としても特別休暇を与えることは決定済なので、どうぞご心配なく・・・」

「一週間休むとなると仕事の引継ぎもせんならんし・・・」

「引継ぎ・・・今電話でできまへんか？」

「まあ、できんこともないですが・・・」

「貴方の所属は北摂営業所ですやろ、今電話して所員に引継ぎして下さい・・・」

強引に言うので、営業所員の携帯に電話をして、引継ぎの話を始めると、言葉を遮って、

「大変な事故に遭ったみたいやけど、元気な声聞いて安心したわ。実は書類は全部確認したし、メールもチェックしたし、引継ぎはもう終わってるんや、安心してゆっくり休んでな、ほな・・・」

一方的に言い電話を切ってしまいました。

知らない内に引継ぎは終わっていたようなので、他人事のように、

「引継ぎは終わってるみたいです」

と伝えると、

「安心してゆっくり休んでや」

やさしくいたわるように言います。

「分かりました。あ、それから警察が聞きたいことがあるんで明日来るように言われてますけど」

「事故のことを聞かれるんやろう、まあ、形式的なことや、正直に話したらええよ。じゃ帰るさかい、ゆっくり養生して・・・」

そう言い残し、帰って行きました。

## 22 帰宅

副社長が帰ると営業所長が、

「弁当に余分があるから食べていけ・・・」

命令？するので御言葉に甘えて、いただいてから営業所を出て、最寄駅から電車に乗り、1時間ほどで、浪速市郊外のマンションまで戻ってきましたが・・・その間、ずっと後をついてくる人の気配と視線を感じていたので、部屋に入り、カーテンの隙間から前の道を見ると、やはり二人の男がこちらの部屋を見ながら何か話しています・・・。

警察に通報しようと携帯を取った途端、男たちは凶ったように、駅の方に歩いていったので電話はやめ、冷蔵庫からミネラルウォーターを出し、のどを潤してから、椅子に座り、テレビを点けました。

丁度5時のニュースが始まり、トップニュースを見た瞬間、思わず声を上げて椅子から立ち上がりました。

## 23 報道

なんとそれは「乗換駅で私が転落した」という全国版ニュースで、画面には「自殺未遂の疑い」という大きなテロップが示され、次に「長時間残業による鬱病が原因の自殺か？」というテロップが続きます。

アナウンサーは、昨年10月、我社の紀州営業所員が月百時間越え残業を5カ月続けて鬱病となり自殺したことや、今年1月、伊勢営業所員がやはり百時間越え残業を3カ月続け、睡眠不足から居眠り運転で追突事故を起こしたことを挙げて「ブラック企業の体質が全く改善されていない」と非難して「自殺未遂ニュース」を終えたので、他局にチャンネルを回すと同様のニュースを放映中で、別の局では本社に出入りする関係者にインタビューまでしていました。

仮名ではありますが、自分の行動が全国に知られてしまったことの恥ずかしさと腹立たしさに耐え切れずテレビを消した時、丁度、スマホの着信音が鳴ったので出ると、相手は・・・、

## 24 弁護士

「会社の顧問弁護士、山本です」

と名乗り、まず病気見舞いを言ってから、

「明日の警察での聴取について、少し御話したいのですが、よろしいですか？」

御願いに・・・諾うと、

「ありがとうございます。テレビを見て御察しかと思いますが、今、会社は非常にまずいことになってます。今日は本社と営業所に労基局の立入り検査があって、社長と営業所長は1日缶詰にされて、合わせて段ボール10箱もの書類が押収されました」

「警察も労基局と共同歩調をとっていて、近く独自のガサをかける話もあります。ブンヤさんも紀州と伊勢営業所の事案と今回のことを関連付けて、本社や営業所近辺に出没して取材活動してますけど、貴方のマンションあたりでも見かけまへんでした？」

なるほど、マンション前にいた二人、病院からつけてきた記者やったんか・・・。

「確かに、2人組がつけてきて、マンションの前で私の部屋を見て話していました。でもなんでアポなし取材せんかったんかな？」

その(2)や大橋医師など標準語を話す相手と違い、弁護士の大阪弁リズムに乗せられ自然に言葉が同調してゆきます。

「最近是人権の重要性が問われますからな。退院した途端、取り囲んで強引に取材して、それが原因で、病状が悪化したり、自殺したりしたら、マスコミに非難が集まるんで、このタイミングでは自重するんですわ。まあ、一つの節目として、警察の聴取が始まったら、接触してもええんちゃうかというのが、慣例みたいになってます」

「ところで、本題ですけど、明日2時から県警で聴取がありますやろ、貴方が電車にでも乗って出かけたら、ブンヤ何人かがつけて来るし、フライングして途中で接触するもんがおったら面倒やから、うちの助手が運転する車に私も乗って12時半頃迎えに行きますんで、それで一緒に県警まで行きましょう。たしか御宅のマンション駐車場地下でしょう、そこに車入れますから、待っててください・・・」

「わざわざ、すみませんね」

「気にせんでよろしいで・・・。それで聴取が終わったら2週間ほど入院してもらいます」

「ええ！退院したのにまた入院ですか？それに副社長から特休は1週間と聞いてますが」

「大丈夫、社長から特休は2週間に伸ばすと言ってます。聴取が終わって帰って来てもブンヤにマンションを取囲まれて、身動きとれまへんで、滋賀の山奥で、社長の里近くに病院がありますんや、そこで2週間ゆっくり養生してください。明日、聴取が終わって警察署出たところで、私が単独でミニ会見開くし、週末には社長と二人で正式な記者会見するんで、ブンヤさんの取材対象も私らの方に移ってきます。貴方は、県警行く時、保険証と着替え、スマホ、パソコンを持って出て、そのまま滋賀まで行って入院して下さい。2週間後、ひっそりと退院して、何食わぬ顔で会社に復帰したらええんちゃいますか。ほな、明日よろしく」

弁護士は、一気にしゃべり終わると、電話を切りました。

急に空腹になり、夕食を買いに出ようとしたのですが、外にマスコミ関係者が隠れているかもしれないと思うとその気も失せて、カップ麺でわびしい夕食を済ませて、テレビを点けると7時のニュースでも9時のニュースでも全国版のトップは私の転落事故です・・・。

11時過ぎにベットに入りましたが寝付かれず、ようやく3時過ぎに瞼が閉じました。

## 25 警察署へ

翌日、地下駐車場で待っていると車が時間通りに入口から車が入ってきました。声の調子や「ブンヤ」「社長の里」等古めかしいことを言うので、弁護士は高齢だろうと予想していたとおり、鼈甲縁の眼鏡を掛けた70代の痩せた白髪の老人で、車が停まると、弁護士は助手席から降りて来て、あいさつし、名刺をくれたのですが、30代位でスポーツ刈り、ガタイがよい助手は、運転席から動かず、弁護士も紹介しません、

弁護士の指示で、後部座席に乗りこみ、車が地下から地上に出た途端、10人くらいの報道陣に取り囲まれたのにはびっくりしました。

助手席の弁護士は窓を開けて、

「事情聴取が終わったら、わしが警察の正門横でミニ会見するから・・・どいてや」  
大声で呼びかけると一同は車からさっと離れ道を開けたので、車はゆっくりと発進。

「絵が欲しいんや、テレビも新聞も・・・」

「絵って・・・」

「テレビニュースでも新聞でも、車で家を出る時や警察署に入る時の後部座席でほっかむりした容疑者や証人の映像や写真がないとカッコつきまへんやろ。絵が大事なんや。まあでも貴方(あんた)の場合、鬱病で自殺未遂やから、写真もぼかすやろうけど・・・」

「それから、事情聴取は必ず誘導かけよるけど、あんまり気にせんでええ。誘導に乗って、仕事がきつくて鬱になり自殺しかけたと、言うたところで、それを証明する証拠が今のところありまへんねん。警察も労基も一生懸命探してますやろ。出てこんと思うけど・・・」

県警本部に着くとここの正門前にも報道陣が待ち構えていましたが、ミニ会見の連絡が来ているのか、車を降りた弁護士と私が正門に向かうとすぐに道を開けてくれ、助手は駐車場に車をとめに行きました。

署内に入り受付で用件を述べると、しばらく待つように言われたので、近くにあったソファに座ると、弁護士は、

「終わったら庁内から電話をして、わしもちょっと事情聴取してくるから」  
言い残すと受付で誰かを呼び出していました。

しばらくして制服警官がやって来て「刑事課に案内するのでついて来るよう」言うので、ついて行くと、エレベーターで2階の上り、2号室と書かれた部屋の前まで来てドアを開けたので中に入ると、

## 26 聴取

小さな部屋で右側の壁には畳一畳ほどの大きさのスモークガラスがはめ込まれていて、真中の机には向かい合わせに椅子が配置され、手前には中年の刑事が座わっていて、片隅の小さな机にはノートパソコンが置かれ若い刑事がモニターを見つめています。

「テレビドラマの取調室や！」

思わず声に出して言ってしまうと、中年刑事は少し微笑んで、

「他に適当な部屋がないんで、どうぞこちらへお座りください」

と言い、奥の椅子に座ると、

「今日は、退院から間がなく、御疲れのところを御越しいただき、ありがとうございます」

「・・・初めに申し上げておきますが、貴方は犯人とか重要参考人ではありません。もしかしたら被害者になるかもしれない関係者と言うことで御話を伺いたいのですが、まず、何点か確認事項を御伝えします。聞取りは天井にある監視カメラとボイスレコーダーに記録されます。質問に返答したくないことはする必要はありません。捜査の参考として、貴方の担当医に貴方の診断書を提出してもらいます。聞取りが終わったら調書を読んで署名いただきます。よろしいでしょうか」

どう答えたらいいのか、はっきりわからなかったのですが、分からないことは答えなくてよいようなので、小さくうなずくと、事故当日の行動について話すように言われたので、

「電車を降り、ベンチに座ったところで眠ってしまい、夢で斜面に飛びおりたところ、現実ホームから飛び降りていた」

病院とほぼ同じことを話したのですが、内容についての質問はなく、少し間をおいて、口を開き、

「当日は会社での仕事がきつくて、疲れがたまり、眠気が来たのと・・・」

聞きかけところで、ドア横のインターフォンが鳴ったので、

「失礼・・・」

と言って、外に出たのですが、中々戻って来ません。

10分くらいしたころ、制服警官を連れて戻ってきて、彼を部屋に残すと、若い刑事を連れて外に出て、今度は4～5分後、2人で戻ってくると、

「わざわざ来てもらって申し訳ないんですけど、聞取りをできない事情ができて、本日はこれで御帰り下さい」

「え、何ですか・・・」

「・・・うーん、まあ、事案に新しい展開があったとしか、今は言えまへんけど・・・」

なんとも歯切れの悪い口調です。

「また、御連絡することがあると思いますけど・・・すみません・・・」

2人そろって御辞儀をするのを受けて、部屋を出て、玄関ロビーに戻ると、弁護士と助手がソファに座って談笑していました。

「えらい早いこと終わりましたな・・・」

「いや、始まった途端、部屋のインターフォンが鳴って、刑事が外に出て、それからしばらくしてもう一人の刑事も外に呼ばれて、二人で戻ってくると、もう帰ってよいと言われました」

「ふーん・・・無罪放免の理由についてなんか言うてましたか？」

「歯切れの悪い口調で、事案に新しい展開があった言うてましたが・・・」

弁護士は助手と顔を見合わせ、それから、顔を天井の方へ向けて、つぶやくように、

「新しい展開・・・」

と、言い、しばらくして「はっ」と何かに気が付いたようで助手を見ると、

「ブンヤがなんか知ってるかもしれんな。よし予定変更や、わしはブンヤから情報収集してから事務所に戻るから、ほないきましょか・・・」

促されて、正門から出ると早速、報道陣が集まって来ましたが・・・、

「聴取は終わり、当人はまだまだ肉体的・精神的ダメージが大きいからしばらく入院や。これからわしがミニ報告会をするからこっちへ集まってくれ」

と、報道陣を正門脇に引き連れて行ったので、助手と私は駐車場にとめた車に乗り込みました。

## 27 病院へ

車は警察署を出るとすぐに高速に入り「社長の里」のある滋賀県を目指して進行しますが、助手はもともと無口なのか、弁護士にしゃべるなど言われているのか、まったく話をしません。

近江に入ってすぐ、琵琶湖の見えるサービスエリアでトイレ休憩をして、サンドイッチと飲物を買って、後部座席でさみしい食事を始めた時、助手の携帯が鳴りました。

相手は弁護士らしく、助手は小声で・・・

「そうですか・・・、もう呼ばれんかもしれんのですか・・・、資料はファックスで送るんですね・・・、はい、手続きが終わったらすぐ帰ります。失礼します」

・・・話しを終えたので、内容を聞こうと前に身を乗り出した途端、機先を制して、

「今後のことを話すから手続きと検査が終わったら電話してくれと、先生が言うてます」  
残念ながら黙るしかありません。

車は、琵琶湖東岸を北上する高速を進み、県境近くでインターを降り、東の山脈まで伸びる谷合いの道に入ると、どんどん登って行きます。

やがて、谷が細まり、人家も途絶えた頃、左手に現れた「伯齊會記念病院」の看板脇の進入路を左折し、急坂を登りきると、斜面を切り開いた広いテラスに、3階建ての校舎のような建物が建っていました。

## 28 伯齊會記念病院

どうやらここが件の病院のようで、建物前面の駐車場には乗用車が10台くらい駐車していて、玄関横には病院名をボディに記した送迎用のマイクロバス2台とワンボックス車1台が停まっています。

車を駐車場に停めた時間は14時5分、下車し「伯齊會記念病院」の表札が掲げられた玄関を入ると、掃除が行き届いたロビーがありましたが、人影はありません。

中央にある受付に行き、助手が紹介状のようなものを渡すと案内係の女性が「院長室に行くように」指示するので、ロビー奥にある院長室に行こうとすると、助手は、

「入院手続きをするので・・・」

と同行を拒否、一人で院長室に行き、ドアをノックすると50代くらいの恰幅のいいスーツ姿の男がドアを開け入室を促すので入ると、革張りソファーに座るよう勧め、自分は向かいに座り、

「社長から聞いています。2週間じっくり治療しますから、元気に退院できますよ。うちは入口の看板に監視カメラが付いてるからマスコミが来てもすぐ分かります。山越えして、裏から歩いて来る方法もあるけど、熊出没注意の看板をぎょうさん立てとるから、まあ来んやろ」

そう言って大声で笑い、

「手続きが済んだら、病室に案内します。特別室でWI-FI完備、冷蔵庫、ユニットバスあり、院内にコンビニもあるからなんでも手に入るし、飯は職員食堂で食べたらええし、毎日診察があるけど、まあ、世間話するみたいな診療やから、2週間ゆっくりして行って・・・」

言い終わるとまた大笑いするので、おさまったところで、御礼を言って、ロビーに戻ると、

「手続きは大体終わりました。貴方のサインが必要な書類が3枚あるのでそれだけして、受付に渡してください。御願います。それでは帰りますわ」

助手が言い終わり一礼したので、釣られて礼をしたのですが、

「社長の意向で無理やり2週間休むことになり、強制的に入院もさせられたことに御礼する必要があるのかな？」

## 29 特別室

玄関を出て行く助手の後姿をぼんやり見つめながら、そんなことを考えていたのですが「はっ」と我に返り、3枚の書類にざっと目を通し、サインして受付に出すと、横のドアから40代後半位でやや生え際が交替した小柄な男の事務員が出てきて、入院に必要な検査があるのでついてくるように言い、院長室の前から渡り廊下を通り、裏の建物にある検査室に案内し、

「検査が終わったら事務室に来て下さい」

言い残して帰ったのを見送り、検査室とトイレ、レントゲン室を回り、血液検査・血圧・身長・体重測定・検尿・胸部撮影が小一時間かけておこなわれ、終わったので、事務室に顔を出すと、先ほどの事務員の先導でエレベーターに乗り、2階で降り、ナースステーション前を左に回り、突き当りの特別室という札が下げられた部屋に着き、ドアを開けると、15畳はありそうな大部屋で内には応接セット、普通サイズの冷蔵庫、大画面テレビ、セミダブルのベッドが配置されていて、壁にはWI-FI 完備のステッカーが貼られています。

東向きの窓の外には、雄大な山脈が遠望できるのですが、人家は全くありません。

「ずいぶん辺鄙なところへ来てしまった」

そう感じて、気分が暗くなり、ため息をついたのですが、事務員は気にも留めず、ソファに座ることを勧めるので、腰かけると、向かい側に座り、病院の説明を始めました。

「まず、この病院は、廃校となった中学校を改装し、平成15年に開業。今いるのは本館で、1階は、院長室、事務室、会議室、レントゲン室、検査室があり、玄関ロビーの奥にはコンビニもあり、他に障害者福祉作業所もあります。

2階は病棟、3階は高齢者デイサービスと老人ホームになっていて、診察室、手術室は本館裏の別館に、食堂は本館の南にあった体育館を改装して開設され、一般の人も利用できます。

「朝食は8時、昼食は12時、夕食は18時に職員食堂でとっていただき、診察は午後1時からなので、時間厳守で、別館2階の精神科診察室に行ってください」

話が終わると、2週間分の食券を渡して帰って行ったので、7:00の起床時間、12時と18時の食事時間をスマホにアラーム設定し、それから時間弁護士に連絡すると、非常に興奮した声で、

### 30 犯罪被害者

「予想外の展開になってきたで・・・」

「・・・と、言いますと、どういう展開になったんですか・・・」

「貴方(あなた)は過去に犯罪被害者にやったんや。それも被害を受けてない被害者や」

「えー・・・それはどういうことですか・・・」

弁護士は、質問には答えず、さらに興奮した声で「あなた」を連発しました。

「貴方(あなた)が3歳の時、父親が養子縁組を解いて、貴方(あなた)が父方に引き取られたんで名字が変わるとるんや、それで警察も犯罪被害者やったことの確認が遅れたんや」

「・・・」

「それから、警察が病院で診察した精神科医の意見を取入れて、今回の事故は40年前の事案のトラウマ原因説が有力になり、ブラック企業の過重労働の話は消えかけとるんや。社長の記者会見も貴方(あなた)の聴取もなくなるかもしれん・・・」

「・・・」

「ブンヤも30年前のトラウマが、今回の事故原因やという線になると記事が続かんのや、それで取材も立ち消えになりそうや・・・」

「・・・あの、話がさっぱり分らないんですけど・・・」

「ごめん、ごめん、病院の事務室に誘拐事件の記事をFAXで送ったから読んでみて、これから社長と打ち合わせがあるねん。また連絡するから。ほな、お大事に・・・」

興奮冷めやらないまま、電話を切るかと思いましたが・・・、

「ちょっと出るのが、早いのが気になるなー」

と、小さくつぶやき、電話を切りました。

### 31 FAX

一階の事務室にFAXを取りに行こうとドアを開けると、向こうから先ほどの事務員がやってくるのが見え、私の姿を確認すると手に持った紙をひらひらさせながら「FAX来てますよー」と、裏向けの用紙2枚を私



に渡し、すぐ戻っていきました。

部屋に戻り、ベッドの腰掛けて裏返すと、1980年10月13日付の港市の地元紙で一枚は一面、もう一枚は三面記事のコピーで、いずれも港市で起きた「狂言誘拐事件」の記事ですが、一面に掲げられた犯人写真は、なんと私の母！！

「ああ！！またか！！」

思わず大声が出ました。

つい3日前迄は、大事件には何の縁もない平凡な生活を送ってきたのに、ここにきて、次から次に大衝撃が襲い掛かってくるのはなぜなのか？ひどすぎる！！

動悸が激しくなり、眩暈を覚えながらも、視線は紙面にくぎ付けになり動きません。

大見出しは「狂言誘拐犯逮捕」小見出しには「動機は歪んだ愛情」「わが子を毒殺未遂」「緻密に計画された犯罪」があり「代理型ミュンヒハウゼン症候群」の解説も掲載されています。

しかし、事件の経過、犯人の犯罪動悸、事件の結末などが両紙面にばらばらに記述されていて事件の全容が掴めません。

また、犯人の写真は間違いなく母ですが、名字が今の私と違うのは、弁護士の言う通り、父が事件後、養子縁組を解消したからでしょうか？

深呼吸して息を整え、30秒位黙想し、ようやく動悸が収まってから、新聞記事をまとめるために鞆からノートを取り出しました。

## 32 誘拐事件まとめ

- ・母は、仕事一辺倒で出張が多く、また養子でありながら家業を継ぐことに躊躇する夫が、子供を誘拐されたことにより「自分のこれまでの行いを反省して、家庭や家業を大事にするようになる」と思い、狂言誘拐を思いついた。
- ・自分の両親が3週間のハワイクルーズに、夫が長期の海外出張にそれぞれ出発し、不在となった1980年10月8日、実家で留守番していた御手伝いさんに「大学の同窓会にどうしても出席しなければならなくなり4日間東京に行く」という偽りの理由を告げ、3歳の実子(私)を預け、実際は東京には行かず、港市西郊の自宅に潜んだ。
- ・子供を預けた日の午後、回覧板を持ってきた近所の主婦にこっそり手紙を渡した、手紙には「子供が誘拐された。このことを警察に連絡してほしい。しかし、家を見張られている上、盗聴器もしかけられているから、警察が玄関から入るのは絶対ダメで、夜、隣家の庭から生垣を抜けて来るように」と記されていた。
- ・主婦は近くの交番の警官に手紙を渡し、そこから連絡を受けた県警の刑事が、手紙の通り深夜、隣家の庭から被害者宅に入り、盗聴器を探したが見つからず、翌日、変装した刑事が近所を入念に搜索したが見張りはいなかった。この日、犯人からの手紙が一通、翌日、また一通配達された。両方とも「絶対このことを口外するな、言ったら子供を殺す」とあったので、夫や両親に連絡はできなかったが、何故か身代金受渡しのことは記されておらず、警察は狂言誘拐ではないかと疑い始めた。
- ・事件発生から4日目、突然母が失踪した。警察は緊急配備を敷き搜索を開始、母がタクシーに乗って実家へ向かったことを確認し、実家に急行したが、いるはずの「御手伝いさん」の姿がなかったので、直ちに周辺で聞き込みした結果「該当者らしい女性が幼児を抱いて港市中心部に向かう県道を速足で逃げて行った」という目撃情報を得た。別の情報から「県道近くにある同級生の家に避難しようとしているらしい」と判断、目的地に先回りして幼児と御手伝いさんを保護、刃物を持って追ってきた母を緊急逮捕した。
- ・犯人逮捕後、実家の搜索をしたところ、御手伝いさんと実子を毒殺するために贈られた「トリカブトの搾り汁入りオレンジジュース」が冷蔵庫内にあることを発見したが、幸い飲まれていなかった。

私を抱いて逃げてきたのは御手伝いさんで、二人を殺そうと刃物を持って追いかけてきたのは実の母・・・トリカブトの毒入りジュースを用いて、御手伝いさんと実子を殺害しようとしたのも実の母・・・ひどい脱力

感に襲われながら、何故か、執筆記者の i. s のイニシャルに視線が停まりました。

### 33 主治医

事件のまとめを書き終えたので、窓の外を見るとすでに日は落ちて、山肌は暗く沈み、時計を見てもう18時過ぎ・・ところが、こんな気落ちしているのに空腹感はやって来たので、苦笑いしながら、職員食堂に行くことにしました。

食堂は、元体育館内の1/4位が厨房で、食事フロアはバレーコート4面分位、新たに設けた天井を鉄製の支柱が支えています。

4人席テーブルが5×3列の15セットもあり、10か所のテーブルが埋まっていました。

カウンター横のメニュー表には、朝限定の和定食とモーニングサービス、昼・夜の定食数種類(全てコーヒー付)、カレーや親子丼のような単品があり、食券を見ると何でも注文できるということなので、ハンバーグ定食を注文し、入り口近くの空いたテーブルに座って周囲を見渡すと、一番奥のテーブルには、スーツ姿の院長が白衣の男と向かい合わせに座っていました。

男は恰幅のよい院長とは対照的に体重は40kg台か?と思わせるほど痩せていて、トドと骸骨が話しているように見えます。

私に気づいた院長が手を挙げて招くので挨拶に行くと、骸骨先生の方を一瞥してから、相変わらず、快活な大声で、

「御気分はいかがですか、こちらは前川医師、貴方の主治医です。明日からじっくり治療しますので、どうぞよろしく・・」

・・紹介された前川医師はほとんど表情を変えず、小さな声で、

「よろしく」

と挨拶をした時、ふと港市の病院で来週初めの診療を受けることを思い出し、

「来週初め、港市の病院に通院予約をしてしまったのですが、どうしましょう?」

と院長に聞くと、

「その件ならもう、引継ぎ済です。前川先生は港市の病院の先生の御弟子さんで、先生も全幅の信頼を置いているから、御心配なく」

なんとまた「引継ぎ済」です。自分の関知しないところで「引継ぎ済み」が続くと、やばいことになりそうな気がして、不安が高まってきましたが・・丁度その時、カウンターから料理が出来たことを告げる声があったので、挨拶して取りに行こうとすると、

「どうぞゆっくり食事してください。私らもう終わりましたから引き上げます」

二人とも席を立ちました。

### 34 調査予定事項

食事は意外なほど美味で、病院の飯はまずいという常識を覆されましたし、過疎地の病院で、医者も高齢化していると思っていたのに、食事をしている医師は20代、30代位の若者が多いのも意外でした。

食後のコーヒーを飲みながら、

「母の記憶は脳内に死蔵されていたのに急に復活し、御手伝いさんが、夢の中で手を引く知らないおばさんとして何度も夢に現れたのは何故か?」

「前川医師は30代で若いのにこんな田舎の病院にいるのは何故か?」

「入院に関する経緯も弁護士の話ではマスコミから非難するための隠遁だったはずが、院長の説明では、じっくり治療すると言っているし、入院理由も社長の里近くにあるだけのことでないようだし?」など疑問が、次々と浮かんできます。

食事が終わり病室に戻ると満腹になったせいか、気持ちが前向きになり、

「40年前の事件や今回の一連の出来事、病院についてとことん調べてやろう」

という意欲がわいてきたので、まず

「調べる項目を箇条書きにして、順番にこなして行こう」

と、ノートを出して調べる項目を書き始めましたが、

- 1、自分の戸籍を調べ、父、母、叔母の出自も確認する。
- 2、事件関連の新聞記事をたくさん集める。
- 3、弁護士の素性を調べる。
- 4、伯齊會記念病院と前川医師の素性を調べる。
- 5、港市の病院の医者素性を調べる。

・・ここまで記したところで、食後のやる気は何処へやら、8時を過ぎたばかりなのに、強い眠気が襲ってきて、ベッドにもぐり込みました。

### 35 戸籍

おぼさんの夢もその他の夢も一切見ずに熟睡し、7:00にセットしている携帯アラーム音で目が覚めると、昨夜決めた一覧表の順番に従い、パソコンを立ち上げ、WI-FIにつなぎ、自分の戸籍から調べる方法を探るために、大手弁護士事務所サイトを見ると、

「戸籍謄本は、マイナンバーカードがあればコンビニの端末から取得できる」とあるので、早速院内のコンビニに行き、コンビニ端末を操作し始めたのですが、手順が度々分からなくなり、そのたびに店員に聞きながらようやく自分の戸籍謄本を手に入れて病室に戻ると謄本を目の前に置き、再び関連サイトを開き、

「離婚し、別姓になった親の子供が、別姓を選んだ場合、戸籍に記載される」

ことを確認してから、自分の戸籍を確認するとあの事件の丁度1年後の1981年10月10日付で養子縁組は解かれて分籍、私は父の氏に入籍されていました。

父母の出自や祖父母の係累などは「除籍謄本」に記されているそうですが、本籍地の役所に行かないと申請・受け取りができないようなので、

「残念ながら退院後に行くしかないか・・・」

つぶやいた時、ふと、大学入学時のことを思い出しました。

入学前、入学関連書類と一緒に戸籍謄本も大学に提出しなければならないことを父に言うと、頼んでもいないのに、翌日、市役所に取りに行き、入学関連書類一式の中にあつた表書きに「厳封して提出」と記された「戸籍謄本用封筒」に戸籍謄本を入れ、糊でしっかり封印したものを渡されました。

その折は何の疑問も抱かなかったのですが、たぶん父は離婚や改姓のことを知られたくなかったから、あんな行動をとったのでしょう。

その時、丁度8:00になったので、職員食堂に行くと、

### 36 新聞記事

夜勤明けの看護師や医師、老人ホームの支援員たちが30人近くいて、ずいぶんぎやかです。

和定食とモーニングサービスがメニュー表にあつたので、和定食を注文し、食べながら窓の外を見ると駐車場に車が續々とやって来てあつという間に満車状態になり、自分で歩ける患者や車いすに乗って押されてゆく患者が續々と玄関に入って行きます。

・・食事が終わり病室に戻る途中、玄関ロビーを通ると、外来の診察は9:00からなのに受付には長蛇の列ができていました。

部屋に戻り、本日の「業務」である「誘拐事件の新聞記事集め」に取り掛かりました。

まず、全国紙と地元紙のホームページにアクセス、月額視聴料金の払込手続きをしてから地元紙アーカイブスで、1980年10月14日付朝刊の記事を検索、すると弁護士からのFAXと同じ紙面が出てきました。

翌、15日の記事は3面だけですが、前日の記事に加えて・・・

- ・母は裕福な宝石商の娘であること。
- ・父は、顧客の依頼によりヨーロッパにブランド品の買付に行っていたこと。
- ・地図に記された実家の場所は、私が(その2)と話した音楽ホールのある家で、御手伝いさんと「三歳の

私」が保護されたのは、夢で見た駐車場脇の廃屋前であること。

- ・母は逮捕を逃れようと、がけ下に飛び降り、転がり落ちる際、何度も地面に頭を打ち、失神し、がけ下で逮捕された時は意識がなかったこと。

記事の終わりには1日目と同じく i. s のイニシャルが記されていました。

三日目(16日)の記事は、

- ・母の意識は回復したが、腕や足が骨折していて、体中に打撲があり、治療に時間がかかるので、取調べは数か月後になる。

だけでした。

全国紙の記事もほぼ同じ内容で、掲載は14・15日の二日のみ、地元紙も全国紙も県警発表をそのまま掲載しているので内容はほとんど同じです。

### 37 診察前

10時過ぎになったので、コンビニに行くためにロビーを通ると、診察待ち人数はかなり減っていましたが、入れ替わるように高齢者デイサービスや障害者作業所の送迎バスやバンが何台も玄関前に到着し、次々と降ろす利用者を沢山の支援員や看護師達が介助して部屋に連れて行くためにごった返しています。

コンビニで缶コーヒーを買い、人込みを抜けて部屋に戻り、記事の続報を探し始めましたが、新事実がないためか、記事が飽きられてしまったのか、全く出てきません。

眼が疲れてきたこともあり、パソコンを閉じて、窓から山脈を見ているうちに眠くなり、椅子に座ったまま転寝をしてしまったのですが、12時のアラームで目覚めて、食堂に行くと相変わらずの賑わいで、職員のほかに外来の患者や家族などの姿もあります。

昼食のメニュー表にあったカレーセット(サラダ、コーヒー付き)を注文し、テーブルに座いて、室内を見渡したのですが、院長や前川医師の姿はありませんでした。

食事を終えロビーに行くと、片隅のマガジンラックに地元紙があったので、一面、三面に目を通したのですが、私の転落記事は影も形もありません。

弁護士の言うように、記事のアピール度が少なくなって消えてしまったのでしょうか？

スポーツ面や国際面を読んで時間をつぶし・・・13時10分前にロビーを出て、

### 38 前川医師の診察(1)

院長室の前の廊下を進み、渡り廊下を通過して、別館入口に着き、丁度その壁に貼られていた「診療科一覧」を見ると、内科、外科、耳鼻科、眼科、循環器科、皮膚科、精神科、泌尿器科、肛門科に加えて産婦人科もあり、山奥の過疎地とは思えない陣容です。

それぞれの診療科の下に担当医師名と出勤日も記されていますが、不思議なことに毎日出勤する医師は皆無で、週3日来る医師もたった一人、大半が2日で全体の三分の一は、週1日しか出勤せず、診療科を満たすためには登録医師数は50人以上と多くなります。

前川医師の勤務日も月木の二日間ですが、今日は火曜日なので臨時の診療日なののでしょうか？

不思議に思いながら、エレベーターで2階に上がり、前川医師の診察室前に着き、ドアをノックすると、声がしたので、部屋に入ると、机にはデスクトップのパソコンを前にした白衣姿の医師が座っていました。

前の椅子を黙って指さすので、着席し、医師と向かい合ったのですが、じっと顔を見つめるばかりで、何も話しません・・・。

こちらも見つめ返すと、体は細く、頬はこけていて、首には多くの筋が浮かび、のどぼとけが目立ち、目は白目の面積が狭く、瞳が大きいことに気づきました。

・・・10秒以上たってから、標準語アクセントの小さな声で・・・

「担当の前川です・・・早速ですが、私の診療方針をお伝えしましょう・・・精神科の医師の中には、診療方針を最後まで伝えず、患者と意思疎通ができない者もいますが、私は最初から診療方針、診療目標を患者に示した上で、お互い協力しあって病気の原因にたどり着くようにします。また、当院の慣例で様々な検査を

行いますが、ほとんど意味がありません。まあ、下手な鉄砲も数打ちや当たるので、一つくらいは有効かもしれませんが・私は、貴方の夢の軌跡を多方面から詳細に辿り、貴方の脳内か？現実社会か？またコンピューターの中かに潜む(その2)をとっ捕まえ、正体を暴き、さらに黒幕がいればそれも見つけ出し、それらが貴方とどのようにしてかわりを持ったのか？あなたに何をさせたのか？を解明したいと思います。港市の大橋医師からも貴方が(その2)の正体を知りたがっていたと聞いておりますので、異存はないと思いますが、いかがでしょう？」

前川医師の話は予想外のもので、啞然としていると・・机の引き出しから書類を三通出し、机に並べ、

「貴方は入院に際してここにある三通の書類にサインされました。覚えていますか？」

「・・覚えていますか・・形式的なものかと・・・」

詳しく内容を確認せずサインしたので、なにか不都合なことがあったのかと、おどおどしながら答える  
と・・

「それでは、内容をもう一度申し上げます。一通は当病院の精神科で診療することの承諾書です。但し書きに、患者本人が治療を希望しないときは、その場で拒否できると記されています。もう一通は各種検査の承諾書です。X線を用いるもの、点滴や注射などいろいろありますが、診療同様、各種検査前に実施の承諾を求めるので、やはり、当日、検査実施前に拒否することもできます。最後の一通は貴方が港市の病院で受けた治療・検査のデータの写しを当院でも活用することです。よろしいですか？」

ここで、目を見開くと、瞳が大きくなり、強い視線を感じました。

### 39 前川医師の診察(2)

「・・三通の書類について押印したことは、今後の治療方針を承諾したということですし、先生のおっしゃるように(その2)の正体を突き止めることは、私の希望でもあります。治療をよろしく願います」

やや、気圧されるように承諾すると、

「・・先ほどは、貴方の夢の軌跡を多方面からの視点で詳細に辿ると言いましたが、そのための実験と測定の準備がまだ出来ていません。来週の月曜日には準備が整うので、実施しますが、今日はその準備段階として、聞き取りを行います。まず、話せる範囲で結構ですので、幼児期の最初の記憶から現在までのことを御聞かせ下さい」

「・・今回の夢を見たことにより、記憶からかき消されていた母のことを思い出しましたが、それより前の記憶を蘇らせることは無理です・・4歳以降のことは(その2)が話した通りですが、南都市の祖父母の家で暮らしていたことや、普段家にいない父がたまに人目を忍ぶように帰って来たのは、事件にかかわったことで世間を憚り、どこに隠れていたからでしょう。事件から3年経って、ほとぼりが冷めた頃、祖父母のもとから私を引き取り、浪速市北郊の団地に移り住み、私を小学校に入れ、自身は近くの商店街の洋品店で仕入れの仕事に就き、私には母は私の赤ん坊の頃亡くなったと言い、再婚もしませんでした」

前川医師が首を傾げたので、ここでいったん言葉を切ると、医師は、目を閉じ独り言のように、

「・・貴方の母の記憶がすっかり抜け落ちたのは、この記憶を脳内に封じ込めて、絶対出させないという強い意志の力が働いたのかもしれない・・・」

と、つぶやいたので、

「・・・そういえば(その2)も、貴方が何人もの女性と付き合いながら結婚に踏み切れないまま四十路を迎えたのは、事件の記憶が母性に対する不安、忌避感を生み出したからだと言っていました」

これを聞いた前川医師は、目いっぱい開眼し、

「(その2)はいいところを突いてくるよ・・貴方の半生も、女性会社員との握手についても知っているし、侮れないね・・」

そう言うと、しばらく間をおき・・・目の大きさが元に戻ると、

「続きを御話してください」

静かに催促するので、

#### 40 前川医師の診察(3)

「私の人生は、父子家庭という環境で育ったこと以外は平凡そのもので、中高の成績も半分より少し上くらいで安定？していて、クラブ活動は絵を描くのが好きだったこともあり、美術部に在籍していましたが、美大を目指していた同級生とは違い、大学の社会学部に入ってからはやめてしまい。他のサークルに加入することもなく、ゼミの同期以外には特に親しい友人もおらず、就活当時はバブル後の不況下でしたが、最初から大企業を目指さず、中小企業に入ろうと思っていたので、すんなり入社し、会社でも特に異動希望もないまま、管理や総務、企画などを転々とし、現在は営業も何とかこなしています」

などと、自主性がなく周囲に流されて生きてきた人生をつらつらと語り続け、現在まで至って話のネタがなくなり沈黙した時を見計らって・・・医師は、港市の病院で記録係が超速タイピングした「聞取り記録」らしい文章をパソコン画面上に開くと、スクロールしながら、小さな低い声で、質問を始めました。

「後の夢を見るきっかけとなった女性会社員との握手ですが、貴方は御手伝いさん手の感触と似ていると思ったそうですが、少し考えてみてください。これまでの人生で握手した女性は何人ぐらいいますか？」  
思わぬ質問に戸惑いながら、

「・・・確かに女性と握手した経験は、あまり・・・ない・・・ですね」

前川医師の目は徐々に拡大し、声も少し大きくなってきました。

「日本人の挨拶は御辞儀ですから、握手は、特に女性との握手は少ないはずですよ。御手伝いさん手の感触と似ていたか、いま一度思い出してください？」

「・・・いやあ、自信がなくなってきたな・・・」

「・・・そうですか・・・では、事故当日の夢に移りましょう。貴方は白鷺市行き特急電車を降りてから山岳電車のホームまで行き、西播磨行き普通に乗車、進行方向に向かって左側の座席に座りますが、意識してそこに座りましたか？」

「・・・いや、まったく意識せずに、車内に入った勢いで左側の座席に座っただけです」

私の返答を聞くと眼を最大限に開き、今まで一番大きな声で、

「左側の席に座ったことは重要です。ここに座ると進行中、向かいの窓から東側の山の斜面をしか見えません。ところが、右側の椅子に座ると一つ手前の駅と山合の駅との間で貴方が歩いた谷間の町が見えてしまうのです」

「トンネルを抜けた時、初めて見る谷間の街・・・このインパクトの大きさが、乗車中に谷間の街を見てしまうと薄れてしまいます。夢の作成者は、乗換駅で貴方を車内左側のシートに導いて座らせ、乗車中は谷間の街を見せませんでした」

「貴方は、山合の駅から坂道を登り、不思議なトンネルを抜けて、初めて谷間の街に強いインパクトを受け現実的な感覚がマヒしたところで、道に白線を出して貴方を誘導、昔のバスを出して過去の街にタイムスリップしたことを確証させ、夢に出てきた怖い坂道を通り、小ホールに着いた頃には、異世界にどっぷりつかってしまい(その2)が出て話しかけても、その存在を何の疑いもなく許容してしまう。時間も30分とコンパクトでありながら、貴方には数時間の時間経過を認識させる」

「以上、大変よく作り込まれた作品ですが、作品中に綻びも見られます。一つ手前の駅で、貴方が後ろに気配を感じて、振り向くと女の人と小さな子供が改札の外からこちらを眺めていたところですよ」

#### 41 前川医師の診察(4)

「貴方は、一度振り向いてしばらく見つめた後、前を向きましたが、もし貴方が、電車が動き始めた後でも二人をしっかり確認しようと後ろを向き続けていると谷間の街が見えてしまうのです。これは先ほど言った手順で、貴方をマインドコントロールしようという作成者にとっては都合の悪いことです・・・確かに霧を出すとか塀を立てるとかして、街が見えないようにすることは可能です。しかしながら、作成者は、山間の駅で降りるまで、左側の席でずっと東側を見続けているように作品を作っていたので、二人の登場はアクシデントではないかと思うのです。ところで、この二人、貴方と御手伝いさんに似ていましたか？」

「・・・いやあ、ちらっと見ただけだし、改札は電車から距離もあったし、確かに二人の年齢や背格好は、私と御手伝いさんと似ていますが、顔は・・・はっきり分かりませんでした」

「そうですか、作品ならば最後の駐車場補場面のように二人の顔をはっきり見せるとは思いますが・・・改札の二人登場は作品にないこと、あなたの記憶が夢に表出した例ではないかと思いますが、これからじっくり分析する必要があります」

「ところで、私が今疑問に思っていることが幾つかあるのですが、まず、最初の夢と後の夢で、貴方が持っていた戦隊ヒーローのお面について気になることがあります。二つの夢が実際の事件と一連のものとするとならば、貴方と御手伝いさんが警察に保護された際、お面を持っていたはずですが、夢ではどうでしたか？」

しばらく、思い返してみましたが、

「・・・お面を持っていませんでしたね・・・」

医師は小さく頷くと、

「そうですか、それから、追いかけてきた貴方の母は、新聞記事では刃物を持っていたとされているのですが、夢の中ではなかったのですね」

「・・・そうです。夢の中で母は素手で、包丁は持っていませんでした・・・」

「お面や包丁がないことは作成者の作製ミスなのか？それと、飛び降りて気を失う間に電車内の精神科吊り広告を見たというのは、かなり意図的な感じがするんですがね、まあ疑問と言えば、こんなところですかね・・・」

話が途切れたので、壁の時計を見るともう3時を回っていたので、

「ここに入ってから、2時間経ちましたが、次の診察の人はいないのですか？」

聞くと、それに対して、

「そうですね・・・ここで実際の外来は午前だけなんです。貴方も見たでしょう、午前中の賑わいを・・・午後は臨時の診察なんです・・・それから、今日は私の診察日ではないので、特別臨時診察です」

にこりともせず言った後で、

「・・・ところで、貴方も調べたいことがあるんじゃないですか？・・・今日はこのあたりでやめておきましょう。お疲れさまでした。また来週よろしく・・・」

さすが心理学者！こちらの心底をしっかりと見通していると、感心し、

「ありがとうございました。失礼します」

## 42 コンビニ(1)

挨拶して、退出したのですが、どうも自分は人の話し様につられるようで「前川医師の標準語の影響で、似非標準語をしゃべってしまった」と苦笑いしながら、一階に降りると、医師の言う通り、廊下に人影はなく、各診療室のドアにも「本日の診察終了」の札が掛かっていました。

玄関ロビーも無人で、缶コーヒーを買いに入ったコンビニにも客はおらず、朝と同じ店員がいたので、支払いをしながら、

「・・・昼からは患者も来なくて、寂しいですね」

と聞くと、

「・・・デイサービスや作業所の支援員が買いに来ると、地元の人がちょくちょく車で来るぐらいですわ。ここは午前が勝負時なんです、店長の私が配達に行っていておらるので、バイトの子に任せざるを得ないのがはがゆいんですが」

「えー、コンビニでも、配達もするんですか？」

「いや、嫁はんが店番してる村のミニスーパーの配達ですわ・・・」

「地元の方ですか？」

「ええ、でも大学出てからは地元に戻らず、浪速市でサラリーマンしてたんです。母は大分前に認知症になって、この上の老人ホームに入って、村に一軒だけ残ったミニスーパーは父一人が店番してたんですわ。」

その父も7年前に亡くなったんで、そのまま廃業する予定やったんですけど、葬式の時、何人もの村人から・・・帰ってきて店継いでくれ・・・継いでくれ・・・言われたんです。でもスーパーだけでは生活でけへんで断ったんです。そうしたら、参列してくれた病院の院長さんが・・・今度、院内にコンビニ作るから、その店長もやったら生活できるやろって・・・言うてくれたんで・・・考えてみたら、会社もここ数年、業績が落ちてきて、自分もいつリストラされるかもわからへんし、一人娘は大学卒業して就職したし、今が潮時かもしれんなと思て、嫁はん連れて戻ってきましたんや」

「院長さんも地元の人ですか？」

「ええ、自宅のすぐ近くに住んで、子供の頃からよう知ってる人ですわ」

店長は話好きのようなので、これから、コンビニでコーヒーを買う時に病院の内情をいろいろ聞こうと、挨拶をしてエレベーターに乗りました。

### 43 ミステリーの実態

2階のナースステーションの前を通ると女性の看護師が2名パソコンの画面を見ていますが、実は、特別室に出入りするため廊下を歩く、ずらっと並んだ病室に人の気配がなく、病院につきものの医者の回診や食事配膳を全く見かけないことに違和感がありました。

「もしかして、入院患者が誰もいないんじゃないの？・・・これは明日、店長に聞いてみよう」

そう決めて、部屋に戻り午前に続き、新聞アーカイブスの記事を追いかけたのですが、事件後一週間過ぎると、地元紙も全国紙も関連記事は消滅したのですが、事件発生から100日目まで確認したところで、さすがにギブアップ。

あきらめの境地になり、気持ちが沈んだのですが、ネット検索を思い立ち「港市、資産家令嬢、偽装誘拐」で検索すると、トップに「岡本正幸著、ミステリーの実態 昭和61年 玄菟社刊」が出てきて、10章ある項目の内、第3章のタイトルが、

「昭和55年 港市資産家令嬢が引き犯した奇怪な偽装誘拐」

目次として、

「犯人の父親はチャンドラ・ボース財宝を奪い取り宝石店を開業」

「僅か10年で巨万の富を築くが危ない橋も・・・」

「妻と娘」

「犯人と会社同僚の秘め事」

「養子殿との確執」

「殺人計画」

「鬼畜の所業」

「偽装誘拐」

「破綻」

が並んでいて、間違いなく「母が容疑者の誘拐未遂事件」のレポートのようです。

「ぜひこの本を手に入れなければ・・・」

最大手のオークションサイトを開き、「岡本正幸著、ミステリーの実態 昭和61年 玄菟社刊」を検索すると、見事にヒット！

「3000円ならすぐ落札」

とあるので、早速落札し、当病院に配達するように手続きをすると、機嫌もすっかり直り、気持ちも高揚してきました。

### 44 顧問弁護士の出自

新聞調べも一応区切りが出来たので「調査項目一覧」に従い、まず、顧問弁護士の出自を調べることにして、もらった名刺で所属事務所のホームページを見つけ、登録弁護士欄を開くと現在の肩書は浪速公正弁護士事務所副所長、1950年浪速市生まれ、1972年国立洛中大学法学部卒業、1976年司法試験合格、1977法務



省採用試験に合格し、検事に任官、関東、中部の地方検察庁で検事を務め、1996年港市の地方検察庁に赴任するが、1998年休職扱いとなり、アメリカマサチューセッツ州にある国立犯罪心理学研究所で2年間研究員を務め、2001年に帰国、検事に復職し、2005年浪速検事局を最後に退職し、いわゆる「ヤメ検弁護士」として、上記の弁護士事務所に副所長として迎えられ現在に至っています。

15年間の弁護士時代の担当案件を見ると、校内暴力による傷害事件やいじめ事件等、少年事件の弁護が多く、減刑や不起訴を勝ち取った事案が列举されています。

顧問弁護士をしている会社は私の所属会社を含め3社ほどですがいずれも有名な大企業ではありません。

検事なのに休職してまで、研究機関の研究員になるという、不思議な経歴が気になりました。

#### 45 港市病院の医師

「さて、次は、港市の病院の大橋医師・・・」

まず、病院ホームページを開けて所属医師一覧を調べると当該医師の身分は非常勤ということで、意外に思い人名検索すると本職は「国立港大学附属病院精神科長」と言う立派なものでした。

略歴は、1980年に国立洛中大学医学部を卒業、インターンを経て1985年に学位を取得、翌1986年から1995年までの10年間、なんと顧問弁護士が在籍した国立犯罪心理学研究所で研究員を勤めていて、帰国後、国立港大学附属病院精神科の助教授に就任、2010年には教授、2015年には精神科長に就いています。

専門分野は、「犯罪心理」「犯罪被害者の精神被害」で、執筆論文はほとんど英文ですが、日本の学術誌に投稿された数少ない論文に「犯罪加害者の精神病理」「犯罪被害者のトラウマとその治療」等がありました。

経歴を読み終わった時ふと、

#### 46 前川医師の経歴

「・・・これはもしかして・・・」

という予感が働き、前川医師をフルネームでネット検索すると、豊瑞精神医学研究所研究員(助教)と言う肩書が最初に出てきました。

そこで、同研究所のホームページを探したのですが・・・ありません！

仕方なく、医系研究者データベースで検索すると、同医師は1990年生まれで、現在30歳、2015年国立洛中大学を卒業し、私が入院した港市の病院に就職、そして予感通り2017年、アメリカの国立犯罪心理学研究所に留学、昨年帰国し豊瑞研究所に就職していますが、伯齊會記念病院での肩書はありません。

私に係る3人もの人間が在籍したアメリカの研究所はどんなところなのか？早速日本語で・・・次に翻訳ソフトで英訳して検索をかけたのですが、全くヒットしません。

アメリカの新聞のWeb版やアメリカの連邦組織の一覧なども検索対象にして探してみたのですが見つからず、疲れてきたので、背伸びをして、窓の外を見ると、すっかり暗くなり、時計は18時少し前だったので、部屋を出て食堂に行くと、30人近い人数で賑わっていますが、前川医師や院長は見当たりませんでした。

定食の中から焼魚定食を選び、食べ終わって、コーヒーを飲みながら考えてみました。

「三人が時期は違えども同じ研究所、それもどうやら世間に公表されていない秘密の研究所にいたのは偶然なのか？」

「検事が休職して研究機関で研究するというのはありえるのか？」

「アメリカ国立犯罪心理学研究所だけではなく、現在前川医師が所属している豊瑞精神医学研究所も謎の研究所らしい？」

「最初は、マスコミから逃げ隠れする目的でここに来たのに、実はとんでもなくヤバイ所に来てしまったのではないか？」

不安が高じて来るにつれて、疲労も増してきたので、今夜は「調査」はやめ、テレビを見て早寝することにしようとして、席を立つと、昨日の事務員が近づいて来て、

「明日の検査の予定を御伝えにきました。9時に別館2階の渡辺先生の精神科診察室に来てください。それから入院当初に承諾書を貰っていますが、検査の中にCT撮影もあるので、御承知おきください」

言い終わると、目札をして食堂を出て行きました。

#### 47 検査(1)

翌朝、食事をして一旦部屋に戻ってから、9時に別館2階「渡辺」の名札が下がった診察室のドアをノックすると中にいた男性看護師がドアを開け入室を促すので、入ったのですが誰もいません？

看護師を見ると、奥壁のドアを指さすので、開けると、そこにも部屋があり、机の向こうの椅子に細面ですが、前川医師のように頬はこけておらず、ぱっちりした目のイケメンで、20代後半くらいの医者というより医学生のような白衣の青年が座っていました。

「おはようございます。精神科医の渡辺です・・・どうぞ椅子にお座りください・・・では最初に認知症の検査をいたしますが、よろしいでしょうか？」

愛想よく笑いながら、きれいな標準語で、検査の同意を求めるので、前日、前川医師が「検査の前には必ず同意を求める」と言ったことを思い出し・・・なるほど確かに求めるな・・・ここで、同意すればいいのか・・・では、

「はい、よろしく、お願いします」

その言葉に渡辺医師は、頷き、

「今年の西暦、今日の日付を教えてください」

答えると、引き出しから様々なイラストを印したプリントを取り出し、

「記憶するように・・・」

と指示、時間をおいて、

「記憶したイラストを声に出して言って下さい」

覚えている限り声を出して答え、終わると「暗算」や「連想の問題」を次々出すので、ひたすら返答を繰り返し、ようやく30分ほどで終わると、

「10分ほど休憩しましょう」

と言っておきながら、話しかけ始めました。

「ノーベル賞を受賞した大先生は、実験に使うクラゲを家族総出で海辺に行き、毎日毎日、すくい続け、ついに10万匹を超えたといえます。傍目から見たら異常な光景でしょうね。毎日飽きもせず、クラゲ取りをしているのですから・・・この行為が人類を救う偉大な発明につながったからよかったものの、成果が出ず、徒労に終わったら、無駄にクラゲの殺生をした変な先生のことだけが、近所の人々の記憶に残り、それもだんだん忘れられていったでしょう」

「研究の実態はそんなもんです。医学に絞っても有効性のある研究成果が出ることは十に一つもないでしょう。研究の大半は税金泥棒になってしまいます。偉大な発明は、無駄な研究に目をつぶってくれる国民のやさしさにかかっているのです。そう思いませんか？」

「・・・・・・・・」

急に振られたので、頭が働かず、返答に詰まっていると、少し顔をゆがめ、

「まあ、これは愚痴ですから、スルーしてください・・・休憩時間は過ぎたようですね。ロールシャッハテストをいたしましょうか。よろしいですか？」

「はい、どうぞ」

渡辺医師は紙にインクを垂らして、二つ折りにして、開きできた図を見せて、感想を求めてきました。

適当な思い付きを述べると、ノートに記録し、棚から箱庭のセットを取り出してやり方を説明すると、

「パーツの意味や立てる場所に決まりはありません。貴方の意識の動くままに置いて下さい」

というので、眼に着いたパーツを適当に並べると、しばらく眺めて、写真を撮り、棚に片付けたところで、丁度、昼になり解放されたので、食堂に行く途中、コンビニを覗きましたが、店長はおらず、バイト一人でレジ打ちをしていました。

## 48 検査(2)

食事をして、部屋に戻ろうと思っていたのですが、ロビーの新聞を思い出して、そこで時間をつぶし、13:00に検査室のドアをノックして入室すると今回は看護師はおらず、渡辺医師が奥壁のドアの前で待っていて、一緒に奥の部屋に入ると、傍らに測定器らしい機器がセッティングされたベッドに案内しました。

「これから、脳波の検査をします。よろしいですか？」

諾うと、電話を取り、

「吉岡さん、今から始めます」

と連絡、暫くして、大柄で赤ら顔、白髪頭の50代と思われる作業服の男が入って来て、機械の電源を入れました。

渡辺医師は棚から電極が幾つか付いたヘッドギアを取って、

「被って、ベッドに仰向けに寝てください」

指示に従うと、電極に機械から伸びたケーブルを繋ぎ、機械のモニターをにらんで、画面が立ち上がるのを待っています。

検査技師らしい吉岡氏は、部屋の隅から丸椅子を二つ持って来て、渡辺医師と機械の前に並んで座ったところで、準備が完了したようで、検査が始まりました。

渡辺医師は、発光器で顔に光を当てたり、深呼吸をするように指示したり、いくつか質問したりして、20分ほどで検査が終わり、ベッドから降りると、

「最後に脳のCTを撮りますので、レントゲン室に異動してください」

と一緒に廊下に出ました。吉岡氏は部屋に残ったところを見ると後片付けをするようです。

## 49 検査(3)

1階に降り、建物端にあるCT室に入ると真中にCTが鎮座していて、部屋の片隅にコントロールルームがあり、そこから出てきたレントゲン技師らしい男が、ドーナツ穴の前にセットされている「臥床」に「仰向けに寝るように」言うので従うと、複数の足音が遠ざかりドアの閉まる音がしたので、医師と技師の二人は一緒にルームに入ったようです。

まもなく「ゴウンゴウン」と大きな機械音が響き始め「臥床」が穴に吸い込まれるように入って停まった途端、機械の音を上回るような渡辺医師の大声が「息を止めて」というので、停めたところ、これが結構長く、頭がボーとしかけた頃、やっと「息を吸って」と救いの声、続いて「左を向いて」「右を向いて」などのポーズを要求され、また結構長い「息を止めて」があり、やっと「御苦労様でした。終わりです」の声と同時に機械音が止み、臥床が穴から出ました。

起きて、立ち上がると、渡辺医師がルームから出て来て、

「検査はすべて終わりです。どうぞお帰り下さい。結果については前川医師の診察の中で触れられると思いますが・・・」

言い終わると愛想笑いをしてドアを指さします。

壁の時計を見ると2時を少し過ぎていました。外へ出て、階段を1階に降りロビーまで行く渡り廊下の途中で、渡辺医師の言動の意味がなんとなくわかりました。

前川医師は昨日「検査なんか無駄だ」と言っていたが、渡辺医師は「クラゲ採集のたとえ話」をして、無駄に見える検査も大事だということ示したのです。

前川医師は検査を軽視しているので、今回の結果も無視することになるかもしれませんが、先輩なのか上司なのか分かりませんが、渡辺医師は逆らうことが出来ないようで、そんな悔しさと無力がこみあげて来て、あんな取り繕うような愛想笑いをしたのではないのでしょうか

## 50 大井谷

ロビーを抜け、奥のコンビニを見ると店長一人が所在投げにレジに立っていたので「昨日の疑問をぶつけてみよう」と店に入ると、彼も気づいて愛想笑いをしたので、早速質問しました。

「あの、実は、ずっと気になっていることなんですけど、病棟に入院してるの私だけみたいなんですけど？」

店長はニヤッと笑い、

「気づきましたか・・・、私も6年おるけど、病棟に入院する人は1年1人か2人ですわ」

「ええ？なんで？どんな人が入院するんですか？」

「スキャンダルにあった地元の政治家とか国の役人さんとかが、隠れ場所として使ってるみたいやし、理由もわからんけど夜中に入院して、夜中に退院した人もおるし、入院するのは訳ありの人ばかりで、貴方のような普通っぽい人は初めてですわ」

「へー、そうですか。それと、私一人しか病棟におらんのにナースステーションには二人も看護師がいるんは、なんでですかね？」

「・・・なるほど、はた目から見たらそうみえますなあ・・・実はあの看護師は3階の老人ホームと1階のデイサービスに所属する看護師ですわねん」

「へー、そうですか」

「普段は1階と3階に分かれて利用者の介助をしているんですが、記録や役所の申請書なんかをパソコンで打つ時だけあの部屋に来るんですわ」

「・・・あの20室くらいある病室は無駄になってるんですか？」

「さー、病院のホームページには伝染病が蔓延した時や災害時に臨時病棟として使うために病室を設けている、とか書いてましたけど・・・」

・・・そうかホームページか、事件の記事ばかり調べていて、病院のホームページを見ていなかったなー、病室に戻ったら見てみよ・・・。

その時、ふと、弁護士が「社長の里がここの近くにある」言ったことを思い出し・・・、

「・・・うちに社長、名前は大井一郎でこの病院の近くの生まれと聞いているんですが、知りませんかね？」

「大井一郎さん？・・・大井姓の人は私の村にはいませんな・・・多分、大井谷の出でしょう」

「大井谷？」

「病院の下を流れる川のずっと上流に、大井谷という谷が本流から分かれてますねん。そこには、20軒くらい家があって、全部大井姓やったと思います・・・でも、今、家は一軒もありません」

「みんな引っ越してしまっただけですか？」

「ええ、大井谷に多目的ダムを造ることになり、集落全世帯が立ち退きになりました。最後まで残っていた家が20年くらい前に越して・・・廃村になりました」

「そうですか・・・そこはどんな村やったんですか？」

「宮田先生は、大井谷住人は天皇の子孫やったと言っていましたな・・・」

「宮田先生？」

「・・・私の高校の歴史の先生で、今は市の歴史編纂室にいて、地域の歴史を研究してる人ですわ、5年位前に公民館長さんが子供たちのために公民館で地域の歴史の話をしてもらったんです。私たまたま、同席して、話はほとんど忘れちゃったけど、大井谷住人は天皇の子孫やということだけ覚えてます」

「へー・・・ああ、それから、ここの病院、なんでこんなにぎょうさん医者がいるんですか、入院患者もおらんのに？」

「数は多いし、若い先生が目立ちますやろ、多分、奥之院での研究が主で、時々気晴らしに患者を診てるんとちゃいますか」

「奥の院て？」

「別館の向こうに渡り廊下でつながっている建物がもう一つあるんやけど、診察室はカーテン下げているから見えへんし、奥の院に行くにはゲートがいくつもあって、決まった先生と看護師以外行けへんようにな

ってるみたいです」

- ・聞きたいことは全て聞き、区切りがついたので、例ごとく缶コーヒーを買ってコンビニを出ました。

## 51 病院のホームページ

病室に戻るとすぐにパソコンの電源を入れ、伯斉會記念病院のホームページを開き、まず「**設立趣旨**」のバナーを開くと、

当病院は、平成 15 年、当地出身の実業家大井直則の「僻村でも都会と変わらぬ高度な医療を提供する」という理念のもとに、廃校となった中学校を改装して開業。地位を捨て山奥に隠棲した伯夷、叔斉の故事にちなみ院名を伯斉會記念病院とし、地域の中核病院として住民の健康管理に勤めている。

と記されていて、

「沿革」には、

### 昭和 10(1935)年

当地出身の実業家大井直則氏は、貧困のため十分な診療がされずに亡くなっていく結核患者を救うために王生谷(おうしょうたに)に療養所を開設。結核治療の権威で洛中大学教授の小田英勝博士を三顧の礼を尽くして院長として招聘、博士は大井の情熱にほだされ、来院し治療・研究に尽力する。

### 昭和 30(1955)年

近隣の村々で座敷牢に閉じ込められたり、奴隷のように働かされていた知的障害者や精神障害者のためのサナトリウムを結核療養所の隣に開設。

### 昭和 35(1960)年

サナトリウムの一部に福祉作業所を開設。

### 昭和 40(1965)年

直則は、内科と皮膚科しかなかった村立診療所に多額の寄付をして、産婦人科、耳鼻科、外科を開設、病院として体裁を整えさせる。

### 昭和 60(1985)年

町村合併により旧村立病院は市立病院に昇格したが、建物や診療科の数は旧来のままで、合併による人口増のため、患者が増え、診療が追いつかなくなった。

直則は、洛中大学附属病院で内科医長をしていた次男の直之を呼び戻し、私立診療所を村内に開業、結核療養所、サナトリウムと作業所を隣接地に移設した。

### 平成元(1989)年

直則は農村でありながら高度医療を実施できる総合病院建設を目標に掲げ、開設準備のため奔走する中で、脳出血により亡くなる。享年 77 歳。

### 平成 10(1998)年

直則の死去で計画の実行が遅れたが、診療所長直之や父から事業を引き継いだ長男直治の努力により廃校の中学校を改装し、すべての診療科を備えた総合病院を開業。サナトリウムの流れをくむ「障害者・高齢者福祉施設」も併設。

### 「組織」

院長の下に医局と事務局があり、医局には内科、外科、耳鼻科、眼科、循環器科、皮膚科、精神科、泌尿器科、肛門科、産婦人科を設置。

診療は外来、往診、地域に出向いての保健指導を実施するが入院は受付けていない。しかし、伝染病の蔓延時や大規模災害時に使用するための病室が 20 室、ベットは 60 床が用意されている。

また、市立病院の診療科、病棟、救命救急センターに医師を派遣し協力体制を取っている

### 「施設」

本館 1 階には、院長室、事務室、コンビニ、食堂、障害者福祉作業所があり、2 階は病棟(臨時)、3 階は高

齢者デイサービス、老人ホーム、別館には診察室、手術室、レントゲン室がある。

## 52 ドライブの誘い

ここまで見て来て、ふと、気が付くと、もう5時を回っています。テレビを点けると夕方のニュースをやっていたが、大事件もなく平穏な一日が暮れたようでした。

背伸びをして冷蔵庫の御茶でも飲もうとした時、ドアをノックする音がしたので、開けると渡辺医師が能天気な明るい声で、

「こんばんわ、検査が続いて疲れたでしょう。明日は土曜日で検査も診療もないし、提案ですが、病院のスタッフとドライブに行きませんか？肉体的、精神的苦痛は一切ない気晴らしです。どうですか？」

「・・・ええ、することもないし、お付き合いしてもいいのですが、入院中に外出してもいいんですか？」

「大丈夫です。本来、前もって外出届を出さなければならないんですが、今回は検査の一環という形で医師も同行するので問題ありません。コースを申しませう。病院の前の道を下ってインターから高速に乗り、嶺北市に入って海岸まで行くとうまい蕎麦屋があるんです。そこで昼飯を食べて病院に戻る・・・蕎麦は好きですか」

「ええ、まあ・・・好きですが・・・」

「それでは決まりです。明日9時30分に出発しますから、玄関前に来てください。そうそう、蕎麦好きの同僚2名も参加します。よろしいでしょうか？」

「・・・ええ結構です」

「では失礼します。どうぞ、ぐっすりおやすみ下さい」

ドアを閉め、彼の足音が遠ざかるのを聞きながら

「休みはゆっくりしたかったのに・・・」

とつぶやき、ため息をつきました。

6時になり、パソコンを閉じて、食堂に行きましたが、あまり食欲がなく「にゅう麺」だけですませ、病室に戻るとパソコンを開くこともなく、テレビを見て10時過ぎに寝ました。

## 53 ドライブ(1)

朝から晴天のドライブ日和、財布と携帯だけ入れたポシェットを持って食堂に行き、モーニングサービスを食べ、ロビーで時間をつぶし、9時30分に玄関前に出るとRV車の運転席から渡辺医師が降りて挨拶し、後部座席に乗っていた女性二人も降りて一礼しました。

二人とも初対面で、一人は細面で、ショートカット、やや釣目で唇をしっかりと結び、意志が強そうです。緑のTシャツに白のショートパンツ姿で白いスニーカーを履いています。

もう一人は丸顔に丸い目、ポニーテールをピンクのシュシュでまとめ、肩に花飾りが付いて裾が広がる薄桃色のワンピースを着てサンダルを履きです。

二人共、20代後半か30代初めというところで、ファッション的にはやや若作り感があります。

「こちらは臨床心理士の岡島さん、こちらは鍼灸師の丸山さん、どちらも大の蕎麦好きです」  
医師は「細面」「丸顔」の順に、紹介するとすぐ、

「さあ、行きませう。貴方は助手席です」

そう言って、車に乗り込むと、二人も後部座席に戻りました。

私は岡島心理士のショーパンから伸びる白い太ももに目が行き、ワンテンポ遅れて車に乗り込みます。

「・・・そう言えば何年もこんな気持ちにはなっていなかった・・・(その2)が言うように女性を忌避する精神構造があるのか、女性に気持ちが向くことはなかったけれども、女性の素足に目が行くということは、男の本能はまだ残っていたかも・・・」

と、なぜか？感慨にふけりました？

車は病院の正門を出て、5日前に上ってきた道を下り、インターから高速に入り、嶺北方面に向かうのですが、同医師は、運転しながら自分の生い立ちや大学での研究のこと、伯齊會病院近辺の地形や自然のことな

どを途切れることなく話し続けます。

最初は相槌を打っていたのですが、やがて私が反応しなくてもしゃべり続けることが分かったので黙っていると眠くなってきて、うとうとしかけたのですが、まったく気にせずしゃべり続けているようなので、

「しゃべり続けると止まらないのは精神疾患のせい？」

と、疑いたくなりました。

後ろの二人は同医師のしゃべりは無視して、スイーツやテレビ番組の話をしたりしていましたが、嶺北市に入った頃、静かになったので振り返るとぐっすり眠っていました。

車は狭い平野を抜け、今度は長いトンネルに入り 15 分後によく抜けるとインターを降り、平野を横切り、山脈の九十九折れの山道を登って峠を越えると荒波が押し寄せる日本海が眼下に広がっています。

## 54 ドライブ(2)

坂道を下り海岸沿いの道に出て右折すると少し先に「道の駅」が見えたところで、ずっとしゃべり続けた医師はようやく話を打ち切って、

「出発してから 2 時間たったし、トイレ休憩をしましょう」

と「道の駅」の駐車場に車を停めたので降りると、

駐車場の端には切り立った崖があったので、トイレを済ませて崖下を覗くと、浜辺はなく、波が次々に押し寄せ、直に崖にぶつかるたびに、飛沫が高く跳ね上がります。

ふと、興味を覚え、ポシェットから携帯を出して録画モードで波を撮影し始めたのですが、1 分もたたない内に渡辺医師が後ろから、

「もう行きましょう。昼になると蕎麦屋が満員になるので、店はもうすぐそこですから」

少し怒ったような声でせかすので、車を見ると女性二人も戻っていたので、携帯をポシェットに戻し車に乗り込みました。

出発してすぐに、道沿いに大きな和風建築の蕎麦店が現れました。まだ 12 時前だというのに駐車場はほぼ満車、隅の方に一つだけ開いていたスペースに車を停めて降りると、店内も満員らしく、入口横に一列に並べた椅子に空席待ちの客が 10 人位座っています。

「やっぱり、もう満員だ。でもこの人数ならまだましか」

渡辺医師は、私と女性に椅子に座るように言い、ウェイテングリストに名前を書いてから椅子に座ると、店員が採譜をもって注文を取りに来ました。医師は、

「ここはおろしそばがうまいんです。それでいいですか」

と宣うので、おろしそばは食べてことがなかったのですが、

「じゃ、それで」

同意しましたが、女性陣には、希望を聞くこともなく、

「おろしそば 4 つ」

注文したその時、渡辺医師の携帯が鳴りました。

携帯に出ると相手は外国人だったらしく、英語で話していましたが、顔をしかめ、何度も「ソーリー、ソーリー」と言い、時々頭まで下げているので、愉快的話ではなさそうです。

その内、聞かれると都合が悪いことでもあるのか、座っていた椅子にハンカチを置き、電話を掛けながら駐車場を横切って西の方へ歩いてしまったので、その姿を目で追うと、駐車場の向こうに土産物屋があるのを見つけました。

「席があくまで 10 分以上掛かりそうだし、休んで迷惑をかけた会社に土産でも買って行くか」

思い立ち、財布を取り出し、空になったポシェットを岡島心理士に渡し、

「退院した時、会社に持っていく土産を見て来るので、これで席取りをしといてください」

と頼むと、ポシェットを椅子に置き、

「待ち時間長そうやからゆっくり行って大丈夫ですよ」

承知してくれたので、土産物屋に向かいました。

### 55 ドライブ(3)

土産物屋に入り「後1週間は入院だし、日持ちする菓子でもないかな」と探すのですが、適当なものがありません。ようやく「蟹味せんべいを」見つけ、営業所と本社用の一つづつ買って、蕎麦屋に戻ると女性二人がいなくなっていたので、ウェイティングリストを見ると「渡辺4人」が線引きされていたので、店に入ると壁際の席に既に三人座っていて、こちら向きの席に座っていた女性二人が手を振っています。

ポシエットは壁のハンガーをかけるフックにぶら下げてあり、岡島は、

「団体さんが一気に帰ったんで、すぐに席に座れたんですけど、戻ってきたら分かると思って、中で待ってました」

と言訳？し、渡辺医師は、採譜のおでんのページを見せて、

「この辺りでは、蕎麦が来るまで、おでんを食べて待っているのが普通なんですけど、何がいいですか」と聞くので、

「・・・じゃあスジ肉と厚揚げを」

女性二人にも希望を聞くと「煮抜き」と「大根」だったので、席を立ち店の端の方にあるおでん鍋からおでんを取って大皿に乗せ、小皿も4枚持って戻ってきました。

渡辺は「こんにゃく」と「餅巾着」を選んだようです。

おでんを食べ終わった頃、おろしそばがやって来ました。

どんぶりに出汁を混ぜた大根おろしがたっぷり入り、蕎麦が少し顔を出しています。

ここで渡辺医師の長い講釈が始まるかと思ったのですが、意外なことに、

「さあ食べましょう」

と言うと箸でだしを混ぜ、蕎麦をすすり始めました。

### 56 ドライブ(4)

初めて食べたおろしそばは、おろしに辛味大根が混じっているのか、程よい辛さ、打ちたての蕎麦はよく締まっていて歯ごたえもよく、出汁とのマッチングは抜群で、大満足しましたが、なぜか渡辺医師の講釈はなく、女性二人と黙々と食べて、たいらげるとすぐに帰り支度を始めたので、

「おいしかった。いい店に連れて来てくれてありがとうございます」

御礼をしたのですが、上の空で、返事もなく、レジで私に向かい

「経費で落としますからご心配なく、お先にどうぞ」

とのことなので、女性二人と車の前で待っていると、支払いを済ませた医師は車に乗り込み、すぐ出発しましたが、行きとは、打って変わって無口になり、トイレ休憩もなくひたすら車を走らせ、女性二人は車が動き始めた途端、寝てしまい到着まで一度も起きませんでした。

3時過ぎに病院に着いたので、車から降りて礼を言うと、医師は車の中から目礼をして、すぐに発車、ドライブはあっけなく終了したので病室に戻り、道の駅で録画した波の動画を見ようとスマホを起動させようとしたのですが、バッテリー切れで動きません。

どうやら道の駅で録画して、ポシエットにしまった時、切るのを忘れたので、録画状態がずっと続き、バッテリーが切れてしまったようです。

### 57 録音(1)

スマホをACアダプターに繋いで起動し、録画をはじめから再生、繰り返し打ち寄せる波を見てみると、急に眠に襲われ、寝落ちし、気づくと、丁度蕎麦屋に着いた時の、

「やっぱり、もう満員だ。でもこの人数ならまだましか」

という渡辺医師の小さな声が聞こえたので、ボリュームを上げると、

「ここはおろしそばがうまいんです。それでいいですか」(渡辺)

「じゃ、それで」(私の声)



「おろしそば4つ」(渡辺)

・・の声に続き、渡辺医師が携帯に出て、英語で話し、やがて駐車場の方へ歩いて行き、声が小さくなり、消えました。

「これってもしかして盗聴？」

罪悪感が生じたのですが、続けて聞きたい気持ちが勝り、再生を続けると

「退院した時、持っていく土産を見て来るので、これで席取りをしてください」(私の声)

「待ち時間長そうやからゆっくり行って大丈夫ですよ」(岡島)

・・・(1分ぐらい無音の後)・・・店員の声で、

「お席が御用意できたのでどうぞ」

続いて二人の靴音がして、店に入り、

「こちらのお席にどうぞ」

店員の声の後にポシェットを壁に掛けたらしい、

「がさっ」

という音がして、ここから急に女性二人の話し声が大きく鮮明に聞こえるようになりました。

## 58 録音(2)

「あーあ、大先生も来月にはいなくなから、科研メンバーのよしみで最後の御奉公でついてきたけど・・  
だるいわ・・マルちゃんは、なんで来たの？」

「・・前川先生に渡辺先生にドライブに誘われたから行っても大丈夫かって聞いたんです、盗撮カーの噂もあるし・・そうしたら、心配ない、行ってみたらって言われて・・」

「ええー！うそでしょう。前川先生、渡辺先生のことバカにして評価してないのに・・」

「ドライビングカウンセリングとかで車中ずっと演説し続けるけど、寝てたらいいからって、ただ、患者さんの気になる行動や言動があったら教えてって・・」

「なんや、きっちり仕事言いつけてるやん・・それで気になったことあった？」

「患者さん、岡島さんの太ももに気を取られていたみたい」

「えー、やめてよ。私も気づいたわ、ちらっとやったからええけど、ジーと見られたら寒気がするところやった」

「・・それから患者さん、道の駅で急にスマホを出して波を撮影していたでしょう。ちょっと気になって・・」

「確かにね。なんか海の思い出があるのかな？・・」

「.....」

「あーあ、ファッションセラピーかなんか知らんけど、患者さんの反応見るからといって、何で、私がセクシーで、マルちゃんがロリコンなん・・アラサーにこんな格好させて、ひどいと思わへん・・昨日も認知症検査、ロールシャッハ、箱庭、脳波、CTを1日でやったし・・めちゃくちゃよ・・」

「・・ドライビングカウンセリングって、効果あるんですか？」

「クライアントと正対して顔見ながらカウンセリングすると、クライアントが緊張したり、恥ずかしがったりして、話が續かへんこともあるから、並んで座って話した方が緊張せえへんし、効果があるらしいけど・・クライアントによるけどね。でも渡辺流では、ドライブ中の長い演説の中にキーワードが隠されて、それに対する表情や体の各部の反応を分かるように助手席に向けた隠しレンズ20か所から撮影してるのよ・・まあ新しそうにみえてユングやフロイドの頃からある古典的な心理テストの応用なんやけど・・」

「・・それが、盗撮カーの由来なんですね」

「まあね、本人の同意もなく、勝手に録画することは問題やわ・・研究発表の時は同意を求めると言っているけどね・・」

## 59 録音(3)

「蕎麦屋の前で、英語の電話があって、慌てたのは、なぜですか？」

「それぞれ、大先生、院長の推薦もあって、9月から北カリフォルニア大学の研究員の内定を取ったんやけど、ドクター論文が大学の査読に通って、ようやく採用が本決まりになるみたい。大先生、自信満々で論文を送ったら予想外に直しが多くて、データや文章の訂正をしているうちに再提出期限を過ぎてしまったの、でもそんな悲惨な状況やのにドライブに行くってどう思う？ だいたい、前川先生に張り合って、ドライブカウンセリングで少しでも実績を作っておこうという気持ちがさもしいと思わへん・・・案の定、さっき大学からの電話で、再提出期限が過ぎたからもうあかんと言われてしもたんで、大慌てで、パソコンやメールの調子が悪いから遅れたとか、必死で言い訳していて、なんとか少し時間を貰ったみたい。帰りはぶっ飛ばして帰って、徹夜で直しをして送ると思うわ・・・それより、患者さん来週から本格的な治療でしょ。前川流デューブ聞取りするの？」

「・・・それがね・・・」

(急に声小さくなったのは声を潜めたようで)

「・・・ゾーンに入れるそうなのよ・・・」

(・・・同じように声を潜めて・・・)

「ええ！うそでしょ！ゾーンに入れる、信じられへん！！」

「私もびっくりしたわ。今までゾーンに入ったのは、駐屯地から来たマッショマンと重い認知症患者だけでしょ、会社勤めをしていた普通の患者さんの入室によく許可が取れたと思うわ」

「へー、でも、マルちゃん、どの先生がゾーンに入る時でも呼ばれるんでしょ？」

「うん、先生達みんなゾーンで使う測定器のパッドを特定の神経節や筋肉の上に貼りつけるのは、鍼灸師にさせるのが良いと思っているみたい」

「神経や筋肉のことは、鍼灸師が一番詳しいし、マルちゃん神の手の持ち主やから・・・あっ、大先生、戻ってきた・・・こっちですよ、先生こっち・・・」

(どうやら渡辺医師が戻ってきたようですが、私の不在に気づき、聞いたことのないぞんざいな口調で)

「おじさんは？」

「会社を休んだから、御詫びにお土産を言うと言って、土産物屋に行きました」

「社畜だな・・・」

(と吐き捨てるように言ったところで、私が入口に現れたらしく・・・)

「あっ、患者さん戻って来ました・・・こっちですよ、こっち・・・」(丸山)

「・・・団体さんが一気に出て、買い物に行ってすぐに席に座れたんですけど・・・」

## 60 録音(4)

私が登場したので再生を止め「ふー」とため息をつきました。

道の駅で録画の終了をし忘れてスマホをポシェットにしまい、壁に掛けたポシェットの位置が二人の顔の真横だったことで、明瞭な音声で録音(盗聴?)出来たのでしょうか。

渡辺医師は、言葉遣いは丁寧で明るくふるまうのに、実際は患者を見下し、部下からも尊敬されておらず、現状認識も甘いことが分かりました。

しかし、最も重要なのは来週から治療に使われる「ゾーン」なる場所はどこなのかということですが、もしかしたら店長が言っていた「奥之院」のことかもしれません？

駐屯地から来た隊員と重度の認知症しか入ったことのないところに自分が連れて行かれ、あやしい測定機でどんな測定がなされるのか？

弁護士の言っていた「のんびり休息するための入院」はどこかへ消えてしまい、得体のしれない実験の餌食にされてしまうのか？

不安がこみあげ、暗い気持ちになりかけた時に病室の扉をノックする音がして、開けると女性事務員が「郵便です」とレターパックを持ってきました。

受取って、送り先を見ると先日オークションで落とした本です。

## 61 書籍(1)

暗い気持ちもどこへやら、早速レターパックを開封し「岡本正幸著、ミステリーの実態」を取り出し「第3章 昭和55年 港市資産家令嬢が引き犯した奇怪な偽装誘拐」を読み始めました。

(以下本文)

### ・「犯人の父親はチャンドラ・ボース財宝を元手に宝石店を開業」

犯人の父「八上勇蔵」は、大正11(1922)年、三丹地方の多芳郡小川村(現多芳郡多芳町)の農家の三男に生まれ、高等小学校を出ると浪速市本町の薬小売店に丁稚奉公に入り、問屋に仕入れに行ったり、医院や個人宅に薬を配達する仕事をした。

昭和18(1943)年4月応召、7月輸送船で台湾に渡り、台北市松山空港守備隊の任に着いた。

終戦4日後の1945(昭和20)年8月18日、インド独立運動家チャンドラ・ボースを乗せた飛行機が松山空港で離陸に失敗し墜落、機内に積まれていたトランク2つ分の宝石と貴金属が墜落現場に散乱したのを夜間ひそかに拾い集め、隠し持っていた。

### ・「僅か10年で巨万の富を築くが危ない橋も・・・」

9月末日、復員船が基隆港を出港、1週間後、港市の棧橋にたどり着き、その足で勤めていた浪速市の薬屋を訪ねたが空襲で全焼し、主人一家も消息不明だったので、一旦小川村に帰ったが、大勢の親族が実家に疎開していたため、すぐに浪速市に戻ると薬屋の顧客だった宝石商で働いていた鑑定士を見つけ出し、持ち帰った宝石類の鑑定書を書いて貰い、港市内の進駐軍キャンプで働いていた同郷の先輩の伝で、アメリカ軍将校達に「鑑定書付き宝石」を売りさばき、かなり儲けた。

その資金をもとにキャンプのゲート前に宝石店を開業し、同市の真珠問屋から真珠を仕入れ、復員してきた宝飾職人を雇ってネックレスやアクセサリーを作り、店に置くと米軍人達が競って買い求めた。

進駐軍での評判は、日本人にも伝わり、昭和32(1957)年には、関西に10店、中部に3店、関東に3店もの店舗を構え、従業員も200人を抱える会社に成長した。

しかし、その間、何度も脱税容疑で摘発され、当時占領下にあった沖縄に宝飾品を密輸するために雇った船が港で押さえられて警察で取調べを受けるなど会社経営に汚点もあった。

## 62 書籍(2)

### ・「妻と娘」

昭和28(1953)年、勇蔵は老舗の宝石店「南陵堂」の社長令嬢百合子を娶った。

百合子は良家に育った箱入り娘で、音楽大学でピアノを学んだが、交響楽団にソリストとして招かれる程の名手であり、その上細面で瞳が大きな美人だったので、関西の音楽界ではマドンナ的な存在だった。

勇蔵は仕事一筋の無趣味な男であったが、百合子の音楽活動に理解を示し、自宅の隣に小さな音楽ホール(その2)に合った場所一を造り、演奏会にも援助を惜しまなかったのが昭和48(1973)年、心筋梗塞により47歳の若さで急逝した時、勇蔵は仕事が手につかないくらい落胆したが、5年後20歳年下の妻を迎えた。

音楽ホールは主人を失ったが、勇蔵の意向により、音楽仲間に管理が任せられ、事件までは時々コンサートが行われている。

昭和29(1954)年に誕生した勇蔵の一人娘杉子(私の母)は、百合子がピアノを教えようとしても拒絶して逃げ出したほどで、音楽に全く興味を示さなかったが、文科系・理科系とも成績はよく、中学校では生徒会長に立候補して当選、教員相手に生徒の権利を主張するというリーダー振りを示していた。

丸顔で眉が太く、分厚い唇をしっかりと結ぶ意志の強そうな顔は勇蔵に似ていて、勇蔵は「自分に容貌も性格も似ている」と喜んでいて。

地元の有名私立女子学園の付属小学校に入学、高校までエスカレーター式に進学し、系列の短大に入学するはずだった年に・・・母を失った・・・。

杉子は、音楽に興味はないが、リサイタルで多くの観衆を魅了し、オーケストラと共演する母を尊敬して

いたので、父同様、母の死を悲しみ、家に引きこもったが、1か月後、心機一転「関東の大学に進学する」と言いだし、反対する父を説得し受験した。

### ・「犯人と会社同僚の秘め事」

女子学生が一人もない経済学部に入學、昭和51(1976)年に卒業、帰郷すると父の会社に入社し、当初は事務員をしていたが、二年後、父に「商品企画をしたい」と要望し商品開発部に移った。

そのころ、杉子は同僚で一つ年上の山下正男と仲良くなり、父に結婚の許可を求めたが、勇蔵は有名デパート浪速店の外商として宝石店に出入りしていた中村康夫(私の父)が若年ながら高い売上実績を誇り、物腰、人となりもよかったので、杉子より10歳も年上であったが、二人を娶せ、後継者にしようと決めており「山下は気が弱く、リーダーには不向きだ」という理由で結婚を許さなかった。

杉子は憤り、山下と駆落ちしたので、勇蔵は警察に捜索願を出す騒動になった。

勇蔵は、自分に似た杉子の激しい性格と商品企画力を気に入っていたので、おいしいエサを与えれば、山下を諦めて家に帰って来ると思い「企画部門をすべて任せるから山下をあきらめろ」という条件で説得したところ「山下との結婚をあきらめること」を了承し帰宅した。

山下は関東の店に異動させられたが、未練がある杉子は関東出張の折に密会していた。

昭和50年代中頃になると、勇蔵が進めてきた顧客中心商売に陰りが現れ始め、対照的に、杉子が考案し販売始めた「若者向けの低価格・同一規格製品」が、予想外に好評で、若手社員の中には杉子の企画を支持する者が増えた。

## 63 書籍(3)

### 「養子殿との確執」

康夫は浪速店の外商としてとびぬけた実績を上げ、店長に次ぐ高給を取っていた。

宝石店に出入りしている時、杉子と山下の密会の噂を聞いていたこともあり、勇蔵から養子縁組と宝石店の後継者の話を受けても色よい返事をしなかった。

しかし、勇蔵の度重なる申し出に根負けし「昭和56(1981)年まではデパートの外商を続け、その年に還暦になる勇蔵が社長から会長に引いた後に入社する」という条件で、結婚・養子縁組を受入れ、昭和52(1977)年に入籍し、本宅の隣にある2階建ての離れに所帯を構えた。

翌年には長男正夫(私)が誕生したが、社内では杉子と密会相手との間に生まれた不義の子ではないかという噂があった。

康夫は外商として、高級品の仕入れや調査のために国内だけではなく外国にまで出張し、顧客やメーカー、問屋との付き合いで家を空けることが多かったので、夫婦が一週間全く顔を合わせないこともあった。しかし、いつまでも山下のことが忘れられず、密会の機会を狙っている杉子にとっては好都合だった。

康夫は「不義の子」の噂に対するわだかまりのせいもあり、子供に対する愛情が希薄で子供と家で遊んだり、遊園地に連れて行くことはなかった。

杉子は父親宅に住み込みで働いていた若い御手伝いさんに子供の世話をまかせ、出産後一月もたたない内に出社し、残業もいとわず働いた。

「自分の子供は山下の種である」ことを期待していたが、成長するにつれて康夫に似てきたことに不快感を持つようになり、子供に愛情を注がず、子供は御手伝いさんになついていた。

勇蔵は杉子が結婚したのにいつまでも山下を思慕していることにいら立ち「山下を結婚させれば、杉子の山下への思いを断ち切れる」と考え、結婚相手として杉子が子供の世話をさせていた御手伝いさんを選び、見合いをさせた。

実際、山下は強引で執念深い杉子の性格に耐え切れなくなっていて「出来れば別れたい」と思っていたので、見合い相手の控えめでおとなしい性格を気に入るすぐに結婚を承諾した。

山下の結婚話を勇蔵から聞いた杉子は驚愕し、勇蔵と山下、御手伝いさんを「裏切者」呼ばわりして、激しく憎み、康夫に相談せず港市西郊の賃貸住宅に子供を連れて引っ越したが、子供への愛情はほとんどなく

なっていたので、中学校の同級生に金を払って毎日預けて出勤した。

康夫は益々家に寄り付かなくなった。

このころ、安価な宝石を売る全国チェーンの宝石店が増え、杉子が手掛ける「若者向け製品」の売り上げが急落したので、還暦を機に引退することを標榜していた勇蔵は引退を撤回し「若者路線」を従来の顧客中心の販売に戻すと宣言して、康夫を説得、入社時期を前倒しすることを承諾させ、杉子には度々「退職して子育てに専念しろ」と命じるようになったので、杉子はストレスから不眠症を患い、円形脱毛症も出来、会社も休みがちになり一人家で過ごすうちに、裏切者に対する恨みがどんどん高じてきて、ついに殺意を抱くようになった。

#### 64 書籍(4)

##### ・「殺人計画」

昭和 55(1980)年 9 月、具体的な殺人計画を考え始めた杉子の周りに計画実施の要件が運命の糸に引かれるように集まりだした。

要件 1、勇蔵は仕事一筋でほとんどレジャーをしなかったが、社員が寄付を募り還暦祝いに 3 週間のハワイクルーズをプレゼントしたところ、大変喜び、若妻と出かけることを決め、1980 年 10 月 5 日、市内の外国航路専用埠頭から乗船する。

2、康夫は顧客から注文であるベネチアグラス、高級バック、高級時計を仕入れるために、イタリア、スイスに 2 週間長期出張することになり 10 月 6 日、浪速空港から欧州便で出発する。

3、実家には山下と婚約した御手伝いさん一人が留守番として残る。

杉子は「天がこの好機を与えてくれた」と確信し、まずわが子と御手伝いさんを血祭りにあげ、続いて父や山下も殺す計画を立てた。

#### 65 書籍(5)

##### ・「鬼畜の所業」

1980 年 10 月 8 日、杉子は朝、会社に「体調が悪いので一週間休む」と電話し、前日に家の裏山で植物図鑑を参考に見つけ出して採集し、冷蔵庫で保管していた「トリカブト」の根から毒汁を絞り出した。

次に浪速市内のスーパーで購入しておいた「瓶入りオレンジジュース」に指紋を付けないように手袋をしてから、王冠を栓抜きで歪まないように慎重に開け、中身を少し流し出し「トリカブト」の毒汁に苦みを抑えるためにシロップを混ぜて、瓶に注ぎ込み、蓋を閉じた。

午後になり、子供を車で実家に連れて行き、

「大学の同窓生がなくなり、葬儀に参列するため、急に関東に行くことになった、申し訳ないけど、3 日間預かってほしい、父と夫には自分から連絡しておくから」

と、御手伝いさんに頼むと、誕生以来ずっと世話をしてくれて、子供もなついていたので、快く引き受けた。

「子供が好きなジュースだけど、保存料無添加なので早く飲んでね」

と、袋に入れた毒入りジュース瓶を渡した。

杉子は、その日のうちに二人がジュースを飲んで絶命し、翌々日(10 日)午後に実家を訪れる八百屋の御用聞きが遺体を発見し、本店に通報、そこから杉子の家に連絡が入ることを想定した。

御用聞きが呼び鈴を押しても家人が出ない時は、合いかぎで勝手口を開け、軟弱野菜は冷蔵庫に、根菜類は台所と食堂の間にある倉庫に入れ、伝票を置いて帰ると決められているので、その間どこかで必ず遺体を発見するはずであった。

#### 66 書籍(6)

##### ・「偽装誘拐」

杉子は殺人容疑から逃れ世間の同情を買うために殺人と偽装誘拐を同時に行うことを決めた。

子供を預けた日の午後、回覧板を持ってきた近所の主婦に「子供が誘拐されたので警察に通報してほしい。しかし、犯人に家を見張られている上、部屋に盗聴器もしかけられているから、警察は玄関から入ら

ず、夜、隣家の庭から生垣を抜けて来るように」と記された手紙を渡した。

主婦は驚いて、近くの交番に行き、警官に手紙を渡し、そこから連絡を受けた県警の刑事が、手紙の通り深夜、隣家から被害者宅に入り、今後、身代金要求の電話があることを想定して、電話に逆探知装置をセットしたが、その晩、電話はなかった。

また、住宅内で盗聴器を探したが見つからず、翌日、変装した刑事が近所を入念に搜索したが見張りはいなかった。

この日も電話はなかった。しかし、犯人からの脅迫状が一通、翌日にまた一通配達された。

両方とも「絶対このことを家族や警察に口外するな、言ったら子供を殺す」とあるのみで、何故か身代金受渡し方法は記されていなかった。

手紙の消印は鎌倉と東京だったので、県警は犯人が関東にいる可能性もあるとして、神奈川県警と警視庁に協力を求めた。

毒入りジュースを御手伝いさんに渡してから、2日目の午後、想定では「実家で二人の遺体が発見されて、会社経由で連絡が入り、不可解な誘拐事件が悲劇の結末を迎える」はずだったのだが、夜になっても会社から連絡がなかった。

脅迫状の文言により外部に連絡が取れない上、泊まり込んでいる刑事の目もあるので、会社に電話も出来ず、杉子は焦りと不安で寝ずの夜を過ごした。

## 67 書籍(7)

### ・破綻

3日目朝になっても連絡はなかった。杉子は不安が押さえられなくなり、危険を承知で、実家に行って二人の安否を確認しようと、警察の目を盗み、車に乗り込んだが、バッテリーが上がっていてエンジンがかからなかった。

これで完全に理性を失った杉子は、二人が生きていたら殺害するために包丁をバックに入れて家を抜け出し、タクシーで実家に向かった。

しかし、実家に遺体はなく、二人の靴もなかったことから「二人は生きていて、近所の雑貨屋に買い物に行った違いない」と思い、家を飛び出し、県道から分岐する坂道の上まで来た時、子供を連れて、県道をこちらに歩いてくる御手伝いさんを見つけた。

御手伝いさんは後に「二人で外出した帰り、県道から分かれる坂道の下まで来た時、手に包丁を持って坂道の頂上に立つ杉子を見つけたが、恐ろしい顔つきでこちらに向かって来るので、近くにある中学の同級生宅に逃げ込もうと子供を抱いて逃げ出した」と証言している。

警察は、各部屋を入念に搜索したのに盗聴器は見つからず、外に見張りはおらず、脅迫状は来たが金銭要求はないなど、杉子の発言に信頼性がないことから、狂言誘拐を疑い始めた矢先、本人が姿を消したので、緊急配備を敷いて搜索を開始すると、タクシーに乗って実家へ向かったという情報を得たので、実家に急行したが、本人も留守番の御手伝いさんも姿がなかった。

直ちに周辺で聞き込みした結果「該当者らしい女性が幼児を抱いて港市中心部に向かう県道を速足で逃げて行った」という目撃情報を得た。

別の情報から「県道近くにある同級生の家に避難しようとしているのではないか？」と判断、目的地に先回りして、高台南端の月極駐車場近くで、御手伝いさんと息子を保護した。

杉子は刑事達に取囲まれ進退窮まり、崖下へ飛び下りたが、駆け下りる途中で転倒し、転り落ち、何度も頭を打ったため、意識を失った状態で崖下まで転落し、そこで確保された。

## 68 書籍(7)

### その後

犯人逮捕後、実家の搜索をしたところ、御手伝いさんとわが子を毒殺するために贈られた「毒入り葡萄ジュース」が冷蔵庫内に保管されていた。

御手伝いさんは、杉子が帰ってすぐ、二人で飲むために瓶をよく振ってから王冠を抜いたが、缶裏に小さな植物片のようなものが付着したのをカビの一種と思い、鼻をつけて中身を嗅ぐと微かに青草のような香りがしたので、

「杉子が子供を引き取りに来た時、事情を言って返そう」と飲むのをやめ、栓をして冷蔵庫に保管したので、二人は一命をとりとめた。

偽装誘拐事件の顛末については、犯人確保後すぐに警察から本店に連絡が入ったので、副社長は康夫と勇蔵に「杉子が偽装誘拐事件を起こして逮捕された」ことを連絡した。

康夫は連絡を受けると仕事を切り上げ、航空券を手配し、翌々日には帰国したが、クルーズ船は、太平洋上をハワイに向けて航行中だったため、連絡を受けてから3日後、ようやくハワイに着きいたので、勇蔵夫婦は下船し、飛行機でとんぼ返りしたが、帰国は事件から一週間後になった。

事件の一段落した後、康夫は勇蔵を訪ね、後継者の話を断り、養子縁組の解消と離婚を告げ、息子を連れて家を出たが、勇蔵にそれを止めるすべはなく、すっかり気落ちし、年の暮れ、番頭格の副社長に社長を譲り、完全に引退した。

山下は警察の事情聴取が終わると会社を辞め、御手伝いさんを連れて関東に去り、そこで結婚し、会社勤めをしているらしい。

杉子は転落中何度も頭を打ったため、ひどい脳震盪で意識を失い、県立病院に入院した。

3日後に覚醒してからも記憶障害、言語障害、失語症の症状が出たため大学病院に転院し、治療を行ったが、回復ははかばかしくなく、事情聴取は難航した。

半年後、長期的な治療に切り替えるため琵琶湖の北にある精神病院に転院したため、殺人の動機、殺意が生まれた瞬間、関東発の脅迫状の謎などは本人の口から聞くことができず、闇に葬られた・・・。

杉子は母の死に大きなダメージを受けたが、立ち直り、持ち前の才能を発揮し、仕事に打ち込んでいた。

勇蔵は娘の才能を評価しながらも、全面的には信用せず、自分の手駒として使おうとしたため、杉子は反発し、それが恨みに転じ、ついには取り返しのつかない事件を起こし、多くの人々の人生まで変えてしまった。

本人に聞取りが出来ないため、周辺から得た二次的な情報をもとに事件を再調査したが、本質に十分迫ることが出来なかったのが残念だ。

## 69 感想

文章が終わり、編集者「岡本正幸」と並んで記された「佐竹岩男」に何故か覚えがあったので頭をひねっていると、当時の地元紙記事の文末に担当記者のイニシャル「i. s」があったことを思い出しました。

記事の「御手伝いさんが母に襲われる個所」は文章構成が本文によく似ているので「i. s」は本編の著者「佐竹岩男氏」と同一人物でしょう。

読み終えて、改めて母の恨みパワーの強さと執念深さには恐怖を感じました。しかし、事件そのものには、慣れてしまったせいか、驚きはあまりありません。

事件の前段から母の転落までは、警察の会見資料の写しただけの新聞記事と違い、多方面にわたる取材活動により、リアルで厚みがあり、感銘を受けましたが、母が脳障害のため事件の真相を語る事が出来なかったためか、終盤は事件の結末や後日談などが記されておらず、同記者も述べているように尻切れトンボに終わっています。

ただ、母が転院したという「琵琶湖の北の精神病院」は非常に気になります。もしかしてこの病院の前身施設かもしれません？

考えを巡らしている時、6時のスマホアラームが鳴り、聞いた途端、空腹感が押し寄せてきました。

ここへ来てから精神的ダメージに関係なく空腹感はやってくるようで「昼は蕎麦1杯だけなので腹もへるはずだ」と、本を置いて食堂へ・・・、

## 70 新たな夢

・・・注文した豚カツ定食を完食すると満腹感と一緒に疲れが押し寄せてきたのは、身勝手なドライブにつき合わされ後、根を詰めて読書したのが原因でしょう。

「明日は何事もなく、一日ゆっくり休みたいものだ」と、9時にベッドに入るとすぐ眠りについたので、あの事故以来、まったく見なくなっていた夢(ただしお婆さんの夢とは違う初めての夢)を見ました。

内容は、

「幼児の私が一人海辺で波を眺めていると、後ろから軽く肩をたたかれ、振り返ると若いころの父が笑って見つめています。私は何故か笑い返すことが出来ず、黙って父の顔を見つめていると父は私を肩車して、海に向かって歩き出したのですが、波打ち際でびたりと歩みを止め、くると振り返り、私を下すと、別れの挨拶もせず歩き出し、一度も振り返ることなく、海岸を横切り、堤防を登り、向こう側に下り姿が見えなくなる・・・」

ここで目が覚めたので、時計を見ると6時過ぎで、カーテンの隙間から光が差し込んでいます。

「昨日、道の駅で見た海の情景が新たな記憶を呼び覚ましたのかな？お婆さんと坂道の夢のようにその奥に恐ろしい過去が潜んでいるかもしれない」

そう思うと憂鬱になり、散歩でもすれば気がまぎれるかと、部屋を出て、階段を降り、駐車場と本館の前の遊歩道を建物東端まで進むと、本館と渡り廊下で結ばれた別館があり、その別館の裏から伸びるアーチが連続する密閉通路は、高さが8mはありそうなコンクリート塀を突き抜けて向こう側に伸びているようです。

「この通路を通して、奥之院に連れて行かれ、その中にあるゾーンで人体実験されるのか？」  
想像すると気持ちは暗くなる一方です。

溜息をついて、病室に戻り、テレビをつけると、朝早いせいかわりか宗教アワーか自然がテーマの番組しかやっていません。

それでもぼんやり見ているうちに8時のアラームが鳴ったので、食堂に行き、モーニングセットを食べ、ロビーで新聞を読んでいると、初めて見る男性の事務員が近づいて来て、

## 71 日曜朝(1)

「先ほどあなたあてに電話があり、休日で申し訳ないのですが、よろしければ、電話が欲しいとおっしゃっているのですが？」

「誰からの電話ですか？」

「港市の病院の大橋先生です」

驚いたことに最初に診察してくれた感じのいい精神科医なので、

「大橋先生の電話でしたらかけないわけにはいきませんね」

と、ポケットから携帯を出しかけると、

「事務室の電話からどうぞ」

というので事務室で事務員の渡してくれたメモの番号にかけると、聞き覚えのある丁寧で落ち着いた声で、

「おはようございます。休日の朝から本当に申し訳ありません・・・実は事件で少し進展があったので、それを申上げて、御意見を聞きたいと思ひまして・・・それで本当に申し訳ないのですが、よろしければ今日の午後にでもそちらへ伺おうと思うのですが？お疲れで気分がすぐれなければ、来週でもよいのですが、いかがでしょうか？」

「あーあ貴重な休みがまたつぶれてしまうのか・・・ゆっくり休みたいし、来週の方がいいのになあ」  
思いつつも、事件の進展を知りたいという気持ちが勝り、口から出た言葉は、

「お待ちしております。ぜひ事件の進展を教えてください」

大橋医師は、

「ありがとうございます。それから事前に申し上げておきますが、私一人でそちらへ行くのではなく、貴方が県警で会った刑事二人も同行します。しかし、私とあなたの面談に同席するだけで、聴取は一切しません。なんで同席するかについては、着いてから御話しします。このような条件もありますが、よろしいでし



ようか？」

警察の聴取ではないし、同医師には信頼感を持っていたので、

「条件 OK です。お待ちしています」

と承諾し、医師の承諾御礼の言葉を聞いて、受話器を置きました。

## 72 日曜朝(2)

病室に帰る途中、コンビニを覗くと客はおらず、店長一人が店番していたので、店に入ると早速笑いながら「ごきげんよう」と御挨拶。

「今日、配達はないんですか？」

「昨日中に今日の分まで配り終わって、ゆっくりしようと思ってたら、パートが急に休んだんで出てきたんですわ。そうそう、昨日は渡辺先生のドライブに行ったんですって・・・」

店長が地獄耳なのか？渡辺の行動が病院中に周知されているのか、どちらにしても情報伝達の速さに驚き、

「よくご存じですね。ドライブといっても助手席に座らされて、到着まで延々と演説を聞かされましたよ。でも嶺北のおろしそばはおいしかったです」

「渡辺先生は、悪気はないんですけど、世間知らずと言うか、無遠慮な言動で誤解を与えやすい人やね・・・」

「・・・確かにそういうところありますね・・・ところで、岡島さんは先生の子分なんですか？」

「大阪弁でおもしろいやけど、超優れ者の臨床心理士ですわ。子分どころか彼女の支えがあって渡辺先生が何とか仕事が出来てるみたいです。彼女、20代で中日本大学の准教授になったんやけど、あっさりやめてこの病院に来たんです。でもまた復帰する話もあるらしいですわ」

「よくご存じですね・・・もう一人の丸山さんは、前川先生の子分なんですか？」

「ああ、ケンシロウですね」

「ケンシロウ？」

「経絡秘孔を突くですよ。どんな敵でも一撃で秘孔をついて絶命させる超人的武闘家」

「よく知ってますよ。マンガ読んでましたから」

「彼女は指先に高性能のセンサーを持っていて、どんな肥満体でも厚い脂肪の上から一瞬でツボを押さえる超能力を持っているんです。ここを辞めて開業したら多分、大繁盛しますよ」

「・・・ここには優秀な人が集合しているみたいですね」

「確かに、優秀な医者や医療関係者が集まっています。市立病院とは雲泥の差ですわ。ただ、2～3年でいなくなってしまうのが、さみしいですけどね」

「なんで長続きしないんですか？」

「前も言いましたけど、ここへ来ると外来を短時間やれば、後は潤沢な予算を使って奥之院で研究に専念できるらしいですけど、人里離れた山奥で、息抜きするところはないですし、競争も激しいんじゃないですか・・・」

・・・奥之院が出てきたので「ゾーン」との関係について聞こうとしたのですが、ドライブの話がすぐばれていたこともあり、うっかり聞いたら、病院側に筒抜けになってしまうかもしれないと思い、質問を踏みとどまり、例のごとく缶コーヒーを買って店を出ました。

## 73 出張聴取(1)

病室に戻りテレビを見て、12時に食堂に行きましたが、あまり食欲がないので、きつねうどんを食べ、ロビーで一度読んだ新聞を再読していると、先ほどの事務員が近づいて来て、

「今、電話があり15分程で着くそうです」

「・・・分かりました」

答えたものの特に準備することもなく、ぼんやり外を見てみると、1時過ぎに黒のミニバンが駐車場に停まり、中から男が三人おりてきました。

村上医師は刑事二人を従えて正門を入りロビーに来ると、少し微笑みながら、

「お休みのところすみません。聞取りは短い時間ですませますので、ご容赦ください」

言い終わり、深々と一礼、刑事二人は目礼すると、年長の方が、

「申し遅れておりましたが三宅と言います」

続いて若い方が、

「吉田です」

自己紹介すると、いつの間にか件の事務員が来ていて、

「どうぞこちらへ」

と誘導、院長室隣の会議室のカギを開けると、室内には長机が1mの間を取り、向かい合わせに配置され、奥には3脚、手前には中央に1脚、椅子があり、ペットボトルのお茶も人数分置かれ、準備万端です。

#### 74 出張聴取(2)

医者は向こうの机の一番左に刑事達は右隣に座り、私が手前に着席すると、手提げかばんからノートとペンを出し、

「お休みなのにすみません。私からいろいろお聞きしますが、最初に要件を2点申上げておきます。まず、貴方の発言については、今後の診察のためにこちらで記録し、前川君とも情報を共有いたします。また、電話でも申上げたのですが、診察内容が捜査に係ることになりますので、警察の方にも同席していただきました。これら条件を御承知いただけるでしょうか？」

諾うと、

「ありがとうございます。それではまず、今回の診察に至った経緯からお話ししましょう。

本来、病気に関することは医者、事故や犯罪に関することは警察が担当するのが筋ですが、本件は、両分野に係りあるので協力が不可欠になります。また、医者も警察も当該者から話を聞く場合には、相手に先入観を与えないために入手した情報を開示せず、白紙の状態では話を進めるのが一般的ですが、本件についてはこちら側の持っている情報がある程度披歴し、逆に貴方に先入観を持っていただくことにより、心底深く眠っている記憶の欠片を浮かび上がらせ、事件に関する有効な情報が得るという方法を実施させていただくことにしました」

ここで、言葉を切り、刑事がそろって頷くのを確認し、ペットボトルを開けお茶を一杯口に含むと、

「さて、まず事故に遭った当日の朝の記憶を思い出して貰いましょう。貴方は浪速市内の私鉄駅から白鷺市行きの特急に乗ったと言われましたが、マンションの部屋を出てから駅までの道中、何か変わったことはありませんでしたか？誰かに挨拶するとか？話しかけられるとか？」

「いや、マンション内でも道中でも人との接触は全くありません」

「そうですか。駅ではどうですか？人に会うとか売店で何か買うとか？」

「いえ、人との接触は一切ないですね。券売機で山合の駅までの切符を買って、電車に乗っただけです」

「ホームや車中ではどうですか？」

「変わったことは、まったくありません」

#### 75 出張聴取(3)

「当日は妙に暑かったとか、風向きが変だったとか、何でもいいですから、違和感を持ったことがあれば・・・」

「いやあ、印象に残ることは何もないですね、切符を買って、電車に乗って・・・」

「・・・では、電車の中のことを聞きましょう・・・。隣にだれか座りませんでしたか？」

「電車は休日なのに結構込んでいたようで、確かに私の両隣にも誰か座っていたような・・・気がしますが・・・」

・・・医師はここで一旦、口を閉じて、隣の刑事に目配せすると・・・、

「さて、では、そろそろこちらが得た情報を御伝えたいでしょうか・・・県警では、事故と並行して事件

の可能性も考えて地道に捜査を続けてきました。実は、貴方が乗換駅で下車した時、ホームの監視カメラに灰色のジャケットを着た背の高い男が寄り添って降りて来るのが映っているんです。私は、寝起きで、覚醒しきれず、少しふらついている貴方を親切にサポートしているのかなと思っていました。しかし、ここにおられる刑事さん達が男の動きが不自然なので、電車内での行動も知りたいと提案されました。電車内には監視カメラがないので、車中の様子は分かりませんが、各駅のホームには複数の監視カメラがあったので、カメラに映った通過電車の車内映像すべてをお二人で数日かけてチェックされました。大変な努力の結果、画像は粗いのですが、貴方の右隣に灰色ジャケット男が座っていることが確認できました。この男は、始発駅から乗車してからずっと通路に立っていたんですが、貴方が乗ると貴方の隣に座ったんです。気が付きませんでしたか？」

「・・・いやあ、全然気が付きませんでした」

「この人が来てから何か変わったことはありませんでしたか、独り言を言っていたとか？イヤフォンから音漏れしてたとか？」

「私は、ずっと前を見ていたんでイヤフォンをしていたかどうか気が付かなかったんですけど・・・そういえば、微かに音楽が聞こえていましたよ・・・」

医師は少し身を乗り出し、刑事二人は顔を見合わせました。

「どんな音楽でした。それはずっと続いていましたか？」

「・・・確か、接骨院でマッサージ中にかかっている・・・他に歯医者でかかっている・・・あの、環境音楽というんですか、眠気を誘うような、オルゴールのような・・・曲名は・・・卒業写真だ！確かにそうです。間違いありません・・・」

「・・・音楽は何時まで聞こえていました」

「いつまでかな・・・途中で眠気が襲ってきて、うとうとして・・・乗換駅に着いた時、誰かに肩をたたかれて気が付いたような気がします・・・」

「そうですか、灰色ジャケット男が、貴方を起こして、ベンチまで連れて行ったことは間違いありません。そして、ベンチに座った時、下を向いてははっきりわからないのですが、貴方は眼鏡をかけているようなんです」

「えっ、眼鏡・・・でも眼鏡は持ってないし、ベンチで眼鏡を掛けて寝ている姿が監視カメラに写っているのですか？」

「それが、降車時もベンチに座っているときも丁度顔のあたりが死角になっていて、はっきり見えないんです・・・線路に飛び降りた時も頭の後ろ半分しか見えませんが、かろうじて耳のあたりに眼鏡のツルのようなものが確認できるので、おそらく眼鏡を掛けていたんでしょう。灰色ジャケットの男は、乗換駅に着いて、乗客が席を立ったり、降車側ドアに目を移し、貴方への視線が切れた時を見計らって、貴方に眼鏡を掛けさせ、肩をたたいて起し、寄り添って下車し、椅子に座らせたのではないのでしょうか・・・」

「男はそれからどうしたんですか？」

「・・・ホーム端の階段を上り、地下1階の改札を出て、そこで足取りが消えているのです。たぶん、監視カメラのない出口から地上に出て、車で移動したと思われます」

「・・・私が線路に転落した時眼鏡も外れて飛んだはずやけど誰が拾ったんやろう？」

## 76 出張聴取(4)

「貴方が線路に飛び降りて壁に頭を打ち付け、失神した時、何人かの駅員や保線係員が救助のために線路に降りる様子が監視カメラに写っているのですが、県警が映像を実際の関係者と照合したところ、その中に一人、部外者いたのです」

「その人が眼鏡を拾ったと・・・」

「あくまで可能性ですが・・・」

「・・・まあ、今回の事案は単純な事故ではなく、人為的な犯罪行為が行われたことは、間違いな

よう・・・さて、今までの話で他に何か気づいたり、思い出したたことはありませんか？」

「・・・私は、車中で音楽を聞かされ半覚醒状態になり・・・眼鏡を掛けさせられ、ベンチに座らされ、乗換駅から崖の上までの物語を眼鏡に投影された映像で実見したんでしょうか？・・・でも、ずっとベンチに座っておとなしくしていたのに、私が母を追って、崖下に飛び込んだ行動は、実際に体を動かしたんですよ？・・・なんでこの時だけ体が動いたのでしょうかねえ？」

「体が動いた理由は、まだはっきりとはわかりません。ただこの行動がその後の展開に大きな影響を与えたことは間違いありません。貴方は最初、港市の病院で私の、伯齊會記念病院に入院してからは前川君の診察を受け、その過程で貴方が犯罪被害者でその時のトラウマを持っていることが確認されたわけですから」

・・・話が途切れたところで、医師は腕時計を見て、

「・・・さて、急に押しかけて、記憶の掘起しを無理強いして申し訳ありませんでした。御疲れのことと思います。新たに思い出すことがなければ、聞取りは終わりにいたしましょう。今日は、今後の診療や犯罪捜査の進展に期待出来る情報を得ることが出来たことを感謝いたします。本当にありがとうございました」

3人同時に椅子から立ち上がるとそろって礼をしました。

私も立ち上がり礼をした後、情報がすぐ洩れる院内で、変に勘繰られないように慎重に言葉を選びながら、一つ質問しました。

「先生、事件とは関係ないんですが、現在、前川先生の診療を受けていますが、来週いっぱい退院できるかどうか、御存じありませんか？」

医師は、笑みを浮かべながら、

「前川君から診療は順調に進んでいて、来週後半には必ず退院できると聞いています」

予想以上のうれしい答えに、

「ありがとうございます」

やや上ずり気味の声で礼をして、3人一緒に部屋を出て廊下をしばらく進んだ時、三宅刑事が、

「部屋に忘れ物をしました」

と引き返して行きましたが、二人は構わず、駐車場を出て車の前で待っていると1分ぐらいして三宅刑事が走って来て、

「勘違いでした。ポケットに入っていましたよ」

大橋医師は、笑いながら、

「鬼刑事も忘れ物をするんですか」

少し微笑み、吉田刑事は、

「先輩も御疲れだから」

三宅刑事は肩を竦め、それから3人そろって別れの挨拶をして、車に乗り込み発車したので、見送っていると、御馴染みになった事務員がいつの間にか横に来て、坂を下って行く車を見送っていましたが、車が見えなくなった瞬間、事務員の口角がほんの少し上がりました。3人をさげすむような嘲笑に思えたのは気のせいだったのでしょいか？

## 77 いろいろな思い(1)

スマホを取り出しの時間を見るともう二時過ぎです。

ロビーの新聞も読み切ってしまったので、テレビでも見ようと病室に戻る途中、コンビニを覗いたのですが、店長はおらず女性のパートが店番をしていました。

病室に入り、ベッドに腰かけた時、ふと先ほどの医者言葉「体が動いた理由は、まだはっきりとはわかりませんね」を思い出しました。

「そうそう、なぜ、あそこで体が動いたのか、謎だ」「・・・いや、まだまだ謎がある。なんで御手伝いさんと山合の駅からトンネルまでの坂道を登っていたのか？」

佐竹岩男氏のレポート改めて読み返すと「母が実家に来た時、御手伝いさんは雑貨屋に買い物に行くため

子供を連れて外出していた」とあるのですが、本当に雑貨屋に行ったのか？

「本人に聞き取りが出来ないため、周辺から得た二次的な情報をもとに事件を再調査したが、本質に十分迫ることが出来なかったのが残念だ」

そう佐竹氏も述べているように事件後、当事者への追及が不十分で、抜け落ちていることが多いことは間違いないので、それをまとめてみよう、ノートを出して思いつくまま書き出すと、

- ・母に坂で会う前に御手伝いさんは子供と一緒に何処へ行っていたのか？
- ・戦隊ヒーローのお面はどこで買ったのか？
- ・(その2)の意見を信じるなら、おばさんとトンネルをくぐり街中を歩いて母と会った坂の下まで来たはずだが、何でそのコースを取ったのか？
- ・通過したはずの街中になぜ人がいなかったのか？
- ・御手伝いさんは母が刃物を持っていたと証言しているが、夢では刃物を持っていなかったのは何故か？
- ・母が転院したという「琵琶湖の北のサナトリウム」はこの病院の前身施設なのか？

以上が、未解決のままです。

## 78 いろいろな思い(2)

他に不審なことはないか、脳内からひねり出そうとししばらく苦闘しましたが、これ以上は無理なようで、「この辺で終わりかな」

そう言って、ため息をつくと急に睡魔が襲ってきました。

聞き取りで緊張していて疲れたようで、ベッドに横になると熟睡してしまったのですが、18時のアラームで起きると、途端に空腹感が・・・

ここに来るまでは、こんなに食い意地が張っているとは思わなかったのですが、一日三食食べないと腹の虫が収まらなくなったようで、早速食堂に行くと、休日らしく人は少ない中に私服の緑色のシャツを着た前川医師とやはり私服のコンビニ店長が同じテーブルから、立ち上がりかけているところに出くわしました。

テーブルに空のコーヒーカップが二客あるところを見るとコーヒーを飲んでいたようです。

あいさつに行こうとすると、私に気づいた前川医師は店長を先に行かせ、私の方に歩いてきて、目の前に来ると生真面目で冷静な口調で、

「丁度良かった。明日の検査のスケジュールを御伝えます。明日は午前10時に診察室に来てください。午前は診察で午後は1時から3時くらいまで測定があります。ただ、もしお疲れのようでしたら午前の診察だけで、検査は延期することもできますが？」

「いや大丈夫です。疲れはありませんので、一日頑張ります」

「ありがとうございます。お待ちしております。(その2)の正体を明かしてやりましょう。では失礼」  
玄関の方に行きかけるのを、引き留めて、聞きました。

「先生は店長と親しいんですか？」

これに対して、

「店長は親切で、話し上手、私の好きな飲物なんかを仕入れておいてくれるし・・・今日は久しぶりに町で一杯やろうということになってね。これから出陣です」

初対面以来、はじめて笑顔を見せると、目じりに笑いしわまでできていて、

「では、改めて失礼」

と二度目のお別れを告げ、玄関の方へ去って行くのを見つめていると、

## 79 違和感

なにか、言いようのない違和感が残りました。

店長は医師達を奥之院で秘密の研究をしているらしいと推測を述べていましたが、当事者の医師と飲みに行くほど親しいなら本当は実態を知っているのではないか？

ドライブのことも3人のうちだれかから聞いたのか？

もっともっといろんな情報を知っていて、黙っているんじゃないか？

医師達も店長から私の情報を得ているんじゃないか？

次々、疑惑が浮かんできますが、食欲には勝てず、焼魚定食を注文して完食、病室に戻り、テレビをつけると丁度7時のニュースが始まりました。

東欧の紛争、国政の混乱、中学校のいじめ事件、地滑り被害の続報、天気予報が終わると地方ニュースになり、都の祭りに次いで報道されたのが「浪速市に本社がある機械リース会社北米機械が、米国の親会社から今春結んだ新事業の提携を一方的に破棄され、日本に派遣されていた担当者も無断で帰国して連絡が取れなくなった」「北米機械は、契約不履行と背任の訴えを米国の裁判所におこす」というものでした。

同社は「(その2) の出てくる夢」を見るきっかけをつくった技術課長のいる会社です。店長達に対する違和感が残っているところに新たな疑惑が追加されたことで、心に強い負荷がかかったのか、動機がして、指先が震えてきました。

気を鎮めようと、お茶を飲みながら同局の9時のニュースや他局のニュースを見たのですが、同様の放送はありません。

11時を過ぎになり「明日は仕事で付き合いがある同社社員が出勤するので、電話をかけて実情を聞いてみよう」と決めると気持ちも落ち着き、12時前にベッドに入りました。

## 80 事前説明(1)

翌日、8時にモーニングサービスを食べ、ロビーで新聞を読み、9時を過ぎに病室に戻り、同社社員の携帯に電話をしましたが「電源が入っていないので通じません」という返事、しかたなく会社の電話番号にかけるとなんと「本日は臨時休業しておりますので、明日ご連絡ください」との御知らせが流れてきました。

社員が電話に出ず、会社も臨時休業になってしまうほど親会社とのトラブルは深刻なのでしょうか？

その時ふと「無断で帰国した担当者というのは、あの時の握手した技術課長じゃないか？」

と思い、握手した場面を回想すると手を触れた途端、感触が夢のおぼさんと同じだったのですが、前川医師は、握手の感触は、特定の人記憶ではないと考えているようで、そういわれると自信がなくなって、どちらが正しいのか？ぐずぐず考えていましたが、気が付くと9時55分になっていたのです、急いで病室を出て前川医師の診察室に向かいました。

ノックをして、診察室に入り、椅子に座ると、パソコンの画面をじっと見つめていた、前川医師は、10秒くらいして、こちらの方を向き、抑揚のない小さな声で、

「いろいろなことが起きますね」

「いろいろなこと」ってもしかして「北米機械」のことかしら？でもどう答えたらいいかわからないので黙っていると、今度はすぐに口を開き、

「午後からの検査・測定について説明いたしましょう。検査・測定は、この別館の奥にある研究棟で行いますが、途中、三か所の生体認証ゲートがあります。そこは当院の一部の医療関係者だけしか通行出来ません。貴方が顔面むき出しでゲートを通ると顔面認証が反応してゲートが開かないので、貴方には顔全部を覆い隠していただき、私が押す車椅子に乗ってゲートを通ってもらいます。向こうに着いたら覆いを外し、スタジオに入り、5月15日に貴方が体験したこと、つまりマンションの出発から崖下へ飛び降りたところまでを追体験してもらいます。スタジオに入らなくてもCGを作って3Dゴーグルで見れば同様の体験ができるのですが、スタジオでは風や臭い、いろいろな種類の音も出すことが出来るので、臨場感がちがいます。ただ、貴方が画像に没入しすぎて、崖から飛び込むようなことがないよう測定中、何度か声を掛け、現実に戻ってもらいます・・・ここまでで何か質問はありませんか？」

## 81 事前説明(2)

急に「いつものように、黙っていてはだめだ」言う感情が沸き上がってきたので、思い切って、

「・・・あの日の行程を追体験してみて何を探ろうとしているのですか？」

と聞くと・・・医師は少し沈黙した後、

「まだはっきり検証が出来ていませんが、おそらく犯人は電車の中で貴方の隣に座って何らかの細工をして、貴方を半覚醒状態にした上で、乗換駅で降りる際に3Dゴーグルの機能がある眼鏡を掛けさせてからホームのベンチに誘導し、座らせ、そこで動画を見せたのでしょう。この動画は様々なプロットを経て、貴方が異常な世界に徐々に溶け込んで行くように作られていて、作品としては良い出来です。しかし、先週の診察でも言いましたが、下車する前の駅で親子を見たこと、最後に崖の下へ飛び込んだこと、この2点は、彼らの作った作品にはない場面ようです。なぜこれらが紛れ込んだのか？知りたいですね」

「それから(その2)が貴方の生い立ちや半生の情報をどこで得たのか？調べる必要がありますね。貴方も(その2)が貴方の脳内に住んでいるとは思わないでしょう？」

・・・そこで言葉が途切れると、小さな声で

「ほかに何か？」

と、再度質問、そこで、

「先生、昨日なんですけど、ここへ来て初めて新たな夢を見たのです」

「そうですか、ぜひお聞かせください」

と言いながら机に引き出しからボイスレコーダーを出し、

「録音させてもらってもよろしいでしょうか？」

「どうぞ」

セットが済んで「海岸」の夢を話し、終わると医師は、視線を上に向け、

「・・・映像の効果が、ぼつぼつ出て来ているのかな・・・」

独語の後・・・しばらく間を置き、

「さて、今、10時15分です。13時丁度にごここに来てください。では、お疲れ様です」

診察終了を告げられたので、挨拶して部屋を出ると、廊下のソファに診察待ちの患者が3人ほど待っています。

「私の後にも診察があるということは、特例で最初に入れてもらったのかな？」

考えながらコンビニの前を通ると、レジはパートだけで、店長はいません。

### 83 社員からの電話

病室に戻ると携帯に知らない番号から電話がかかってきたので、少し警戒しながら出ると先ほど出なかった北米産業の知り合い社員でした。

「もしもし、まいど、電話いただいたのに、出られんですみません」

「いえいえ、えらいことになってますね・・・あの一、ところで、無断帰国したのは、先日営業に行った時の女性技術課長ちゃうかと思うて、電話しました」

「ピンポン・・・大当たり・・・いや、あかん、はしゃいでられへん。」

「なんでアメリカの本社がプロジェクト打ち切って、課長が逃げてしもたんですか？」

知り合い社員は、声を潜めると、

「・・・実はすべて詐欺やったんや」

「えー！」

「アメリカ本社の副社長からの電話、メール、プロジェクト担当で乗り込んできた技術課長、全部偽物やったんや・・・めちゃくちゃやろ・・・それで、今日の朝礼でも社長が早急に善後策を立てる言うて、仕事が始まったらすぐに、警察が事務所に乱入して来て、ガサ入れや」

「なんで、そんな・・・」

「逃げた技術課長が、詐欺の容疑者やから、ガサ入れされても仕方ないんやろう・・・もう泣き面に蜂やで、あんたに電話床思ってたけど、社員全員の携帯は取り上げられて、会社の電話に出ることも禁止されたんや。自分はプロジェクトに直接関わってないから、ありきたりの質問受けてさっき解放されたけど、携帯は取り上げられたままなんで、喫茶店のピンク電話から電話してるんや」

「詐欺にあったって、どんなプロジェクトやったんですか？」

社員はここで、さらに声を潜め、小さな声で・・・、

「人間コンピューターのプロジェクトや」

「えっ・・・」

「技術課長の話では、人間は見聞きしたことは、どんどん忘れていくのは間違いで、全部きちんと整理されて脳内に保存されているらしいんや、思い出せんのは、データのある場所にたどり着かへんだけで、特殊な装置を使うと脳内のデータが保存されている場所にピンポイントでアクセス出来て簡単に取り出せる、つまりすべての記憶が、データとして取り出せるというんや」

・・・(その2)が言っていたこととまったく同じことが、社員の口から出てきたので、あの時のことが目に浮かび、頭がくらくらしました。

「・・・そんなこと現実にできるんですか？」

「発達障害の中にサヴァン症候群というのがあって、読んだ本を全部覚えるとか、子供の頃からの一日一日の記憶を全部覚えているとからしいんやけど、こういう脳の特徴は一般人も持ち合わせていて、それを医療技術で活性化するらしいんや」

「・・・」

「技術課長の説明聞いた時は、すっかり納得してしもたんやけど・・・やっぱり全部嘘やったんやろうなあ。課長は逃げてしもたし」

「どこからそんな話、来たんですか？」

「うち医療機械のリースはずっとやっ取るけど、業績がもう一つなんや、それで、事業の多様化とできるし、親会社から来た話やし、社長が飛びついたんや。いわゆる社長案件や。人間コンピューターは画期的や、やろうちゅうことになったんやけど・・・これで会社がつぶれたら、御宅で雇ってほしいわ。ああ、コイン切れになるさかい、ほな・・・」

## 84 急展開(1)

電話が切れて、静かな部屋が戻ってきました。

前川医師と店長の宴会、テレビのニュース、社員からの電話、昨夜から今朝にかけて、自分の周りを取り巻く環境が、急速に悪化していくように感じ、さすがの鉄の胃袋?にも空腹感はやって来ません。

しかし、少しは腹に入れておこうと、食堂に行き、きつねうどんを注文し、食べ終わると、御決りコースとなったロビーでの新聞熟覧を経て、12時55分前川診察室のドアをノックし、入室すると前川医師はデスクから立ち上がり、サイドテーブルを指さし、

「御苦労様です。検査用の服に着替えてください」

「下着の上からでいいか」と問うと「よい」ということなので、上着を脱ぎ白い長そでシャツと白ズボンに着かえると、部屋の隅の車椅子に乗るように言われ、着座すると机の引き出しから黒色フェルト地の枕カバーのような袋を出し、

「よろしいですか、かぶせますよ」

頷くと、頭の前から肩まですっぽり被せられましたが、袋が大きく余裕があるので息苦しくありません。

「では行きます」

車椅子のストッパーを外し、ドアを開け廊下に出て、エレベーターで下に降り、一階に着くと、

「トイレに行きましょうか？」

と言います。来る前にロビー隅にあるトイレに行ってきたので、尿意はないのですが、検査も長時間のようだし「もう一回行っておいてもいいか」と、黙っていると医師は「障害者・車椅子用の多目的トイレに入ります」と言い、ドアを開けて入り、鍵を閉めるがちゃんと言う音が聞こえたので「普通のトイレで、立って用を足すのに」疑問を持った瞬間、前川医師がさっと袋を取り去ると、そこにはコンビニ店員のユニホームを着た渡辺医師がいました。



## 85 急展開(2)

・・・この理解不能な異常事態に直面した動揺があまりに大きく声を出せずにいると・・・

前川医師は、無表情で冷静ながらいつもより少し大きめの声で、  
「予想外のことで驚かれました。実はあなたもうすうす感じているかもしれませんが、北米機械に係る犯罪行為がこの病院にも及んできて、院内に貴方に危害を加えようとしている人がいます。事態は切迫しているので、貴方は逃げなくてはなりません。渡辺先生は貴方の替え玉となって車椅子で研究棟に入りますので、貴方は渡辺先生が脱いだコンビニの制服を着てトイレの向かいにある非常口から出て、外に停まっている車に乗り込んでください。いいですね」

医師が指示を念押しし、話が終わると渡辺医師がユニフォームの上着を脱ぎ始めましたが、顔は緊張でこぼばって、焦っているのか、袖がうまく抜けず、舌打ちをしながら脱ぎ終えて、渡されました。

日々の平凡な暮らしの生活では、こんなとんでもない要求を受け入れることはないのですが、異常事態の中なのに前川医師がいつもに増して冷静なのと仲の悪いはずの渡辺医師が協力するという展開に、二人に対する不思議な信頼感が生じたので、素直に車いすから立ち上り、コンビニの上着ユニフォームを着ました。

上着を脱いだ渡辺医師は車椅子に座り、自ら袋を被たところで、前川医師は、  
「我々がトイレを出てから、十数え、左右を確かめてから動いて下さい、では」  
相変わらずの落ち着いた声で指示すると、車椅子を押して出て行きました。

十数え、トイレ入口から顔を出し左右を見て、誰もいないのを確かめて、向かいの非常口まで速足で歩き、ドアを開けると外には、コンビニのトラックが停まっていて、助手席のドアが少し開いていたので、中を覗くと運転席のコンビニの店長が、こちらを見つめて手招きをしています。急いで乗り込むと、

「ああ、よかった、出てくるまで、ドキドキしましたよ。とりあえず車を下の県道まで出ましょか」  
言うなり出発、車が駐車場から進入路に回ると、進入路の反対車線をサイレンの轟音とともにパトカーが数珠繋ぎになって登って行きました。

「・・・おっ・・・下からパトカーが大挙して登ってきたで、これで悪者ども一網打尽やな」

## 86 地元警察(1)

店長は緊張感が緩んだようで、鼻歌を歌いながら、進入路を通り抜け、県道に出るとそこにもパトカーが5台くらい縦列駐車していて、打ち合わせていたのか、先頭車に近づいて停めると、若い制服警官とスーツ姿で小柄な中年男が車を出て、近づいて来てので、店長がウインドーを下げると、スーツの男は、中をのぞき込み、私に向かって、

「御心配かけました。私は県警捜査1課の刑事です。事情があり、民間人の協力で脱出してもらいました。パトカーに御移り頂き、地元の警察署に移動します」

刑事は乗車を勧めた後、店長に丁寧にお礼を言いました。

「警察に行ったらもう大丈夫や、御疲れさん」

店長の励ましを後に、パトカーに乗り変えると、制服警官の運転で、湖に向かって坂を下り、湖岸に出た時、時計を見ると13時30分でした。そこから10分ほど走り、着いた警察署は3階建ての小さな建物で、刑事に導かれ応接室に入り、ソファに座りました。

いったい病院で何が起こったのか分かりませんが、逃避行？はどうやら成功したようです。

## 87 誘拐事件(1)

5分ほどした頃、刑事がお茶を持って入って来て、向かいに座り、

「無事救出できてほっとしましたわ。一連の事件について、明日、本署で記者会見がありますが、貴方も犯人に狙われていましたし、誘拐事件の主犯とナンバー2はまだ確保されておりません。今晚は保護ということでここに御泊り願います。あつ、丁度2時や、ニュースで事件が放映されるはずです」

刑事が部屋にあったテレビのつけると公共放送ニュースは冒頭からヘリ中継。上空から見おろしているのは、なんと伯齊會記念病院の駐車場です！！

そこにはパトカーが10台以上停まり、警官や鑑識らしい作業服の係員が病院の玄関から入って行きます。次にヘリは麓の集落の上空に移動して見おろすと、畑に囲まれた一軒家の前の道にもパトカーが5台、救急車が2台停まり、10人以上の制服警官が家を取り囲んでいます。

映像上に「病院長監禁事件急展開・・院長・夫人無事保護へ」という大見出しが出てると、映像が局スタジオに切替わり、アナウンサーのナレーションが始まりました。

「当放送局では誘拐事件の情報を事前に確認していましたが、被害者保護のために報道を控えておりました。本日13時30分、警官隊が被害者宅に突入し、犯人が逮捕され、被害者が救出されましたので、只今から、現地の状況と警察発表を御伝えします」

「事件の発端は5月19日木曜日です。この日、犯人4人は、滋賀県北琵琶湖市有瀬の伯齊會記念病院院長大戸康信氏(55)、夫人里佳子氏(52)宅に押入り、二人をナイフで脅し、ロープで縛り、夫人は寝室、康信氏は応接室に監禁しました」

「犯人は『いうことを聞かなければ夫人を痛い目にあわせる』と康信氏を脅し、病院副院長に電話で『インフルエンザに罹患したので出勤できないが、病院のことは自宅から指示する』と伝えさせました。犯人は五日間にわたり院長夫妻を自宅に監禁し、その間、院長は犯人の命令で何度も病院に電話しましたが、通話内容は現時点では不明です。繰り返しますが、警官隊の当該家屋に突入により、誘拐犯人は全員逮捕され院長夫妻は無事保護されました。二人は衰弱していますが、けがはなく、命に別状はありません」

その時、アナウンサーの手元にメモが届けられたらしく、

「ただいま、被害者が病院に搬送されるとの情報が入りました。ヘリに切り替えます」

映像が切り替えられると、救急車が院長宅の玄関庇の下に後部が隠れる状態で停まっていて、家から出てきた救急隊員が助手席に乗り込むとサイレンを鳴らして出発。するともう一台の救急車がバックで玄関に入ったので、アナウンサーがヘリの記者に

「今、被害者が搬送されたのでしょうか？」

呼びかけると、

「被害者のうち一人が搬送され、続いて二人目が搬送されるようです」

と返答、二台目もすぐに出発して行くのを見届けた途端、

「また、新たな情報が入りました。只今、共犯者が伯齊會記念病院内で確保されました」

## 88 誘拐事件(2)

アナウンサーの声と同時に、ヘリは向きを変え、病院上空に着くと、丁度、制服警官2名と私服警官1名がスーツ姿の男を取り囲んで、玄関先に連行して来たところで、3人一緒に駐車場から入口に移動してきたパトカーに乗るとすぐに発車していきます。

続いて白衣を着た男が紺色の作業服を着た警察関係者らしい3人に連行されて来て、別のパトカーに乗りこむとこちらもすぐに発車。隣でテレビを見ていた刑事は興奮気味な声で、

「これはえぐいなー。院長を監禁した犯人に共犯がおって、主犯とナンバー2はまだ逃げとるらしいやん、他にも関係者が芋蔓式に出て来るんちゃうか？これは、ほんま、近来、稀に見る大捕物や・・」

「あの一、院長と夫人を監禁した犯人4人はもう連行されたんですか？」

「まだ、家の中におるやろう。簡単な実況見分と聞き取りをして一人ずつ連れて行かれるはずや・・」

「・・さあ、そろそろ、応援に行かなあかんので、失礼しますわ。こちらのドアの向こうに専用トイレがあるし、御茶がいるときは、こちらの冷蔵庫からどうぞ、飯は6時ごろ弁当を持ってくるさかい。主犯らが捕まるまでしばらく我慢してください」

刑事はトイレの場所とソファの裏に隠れていた小さな冷蔵庫の場所を教えると、出て行きました。

## 89 誘拐事件(3)

夕方までテレビを見続けましたが、通常番組はすべて取りやめになり、民放にチャンネルを変えても同様で、ヘリ撮も継続されていましたが、警察からの新情報はないのか、アナウンサーは同じコメントを繰り返

すばかりでした。

6時になり、仕出し弁当が届けられたので、食べ終わった頃、ノックがあったのでドアを開けると、制服警官が、折り畳み式で移動用車輪が付いたベットを押しながら入ってきて、応接セットの脇にセッティングし、いったん外に出ると敷き布団と掛布団を持ってきて上に敷いて戻って行きました。

その後も飽きもせずテレビを見続けていると、ようやく10時のニュースで「犯人の目的は病院で実施された病気治療方法を記録したデジタルデータを奪い取ること」で「誘拐犯人は、篠崎 蓮(22 派遣職員)、安岡健太(23 アルバイト)、今井良(21 大学生)、佐々木育(22 大学生)の4人。共犯者は病院事務員の中川一信(50)、検査技士の吉岡 幸雄(52)であることが放送されました。

写真がないので犯人の顔が分かりませんが、金曜日のCT検査の時、渡辺医師は検査技士を「吉岡さん」と呼んでいたことを思い出し「あの、赤ら顔の中年男が共犯だった」ことに驚きました。

事務員の中川某は、入院初日の事務員か大橋医師と警察が来た日にいた事務員か、また別の事務員か誰なのか、写真がないので判然としません。

明日以降、いろいろな情報が出てきて、状況が分かってくるだろう、もう寝ようと思い、ベットの横たわった途端、携帯のベルが鳴ったので、

## 90 弁護士からの手紙

でると会社の顧問顧問弁護士でした。

「遅うから、すまへんなー、そのうえ御無沙汰で、それで、早速やけど貴方(あんた)に謝らなあかんことになってしもて、ほんまにすみませんでした」

「貴方(あんた)が飛降りて入院した時、マスコミが騒ぎ始めたんで、マスコミから逃がすために滋賀の病院に行ってもろたんやけど、あんたが入院してから事件の線が出てきて・・・でも、主犯の外人があそこまで無茶するとは思わなかったわ」

「すみません話がよくわからないんですけど」

「ごめん、ごめん、明日の警察の記者会見で詳しく話すと思うけど、話の概要は、脳の病気を利用して脳内に蓄積した記憶を好きな時に正確に取り出す研究をしている外国の脳科学者がおるんや、ところが実験に失敗して体験者の脳に障害を与える例が出たんで、実験は中止され、補助金も停止されて、被害者からも訴えられたんや。そこで本国を逃げ出して、日本で実験の適任者を探してる内に偽装誘拐事件のトラウマあって、最近、悪夢を見始めた貴方(あんた)を知って、実験に適任やと思ったらしい」

「そこで、電車であんたの隣に座って、何らかの方法で半覚醒状態にしてVRゴーグルみたいな眼鏡を掛けさせて、乗換駅ホームのベンチで(その2)や母親の事件が出て来る映像を見せて、その後、何らかの方法で自分らの病院に来させて、記憶に係る検証実験をしようと思てたのに最後のところで、飛降りてもて、身柄が大橋先生から前川先生の方に行ってもたんで検証実験が出来んようになったんや」

「普通、クライアントがよそに行ってもたら諦めるか、ほとぼりが冷めるまで待ってから活動するんやけど、この犯人それが出来んで、院長を監禁して病院の医者に検証実験をするよう命じたんや、結局失敗してもたけど異常な執念や」

「そんなことやったんですか。びっくりしました。でもその外国人なんでそんなに私の情報持っていたんでしょか、私の生い立ちや子供の頃の環境なんか誰にも話してないのに」

「話さんでもよう知っている人間が一人おるやろう」

「・・・いやー、全く思いつきませんが・・・」

「貴方(あんた)の母親や、警察からの情報やけど、まだ死んでへんで、精神障害が回復して普通に戻ったという話もあるんや、県警が主犯の国内での動きを調べてるけど、どっかで接点があったはずや」

母の名が出た時点で体が震え始め、続いて思考回路が遮断され、ベッドからもずり落ち、弁護士が名前を何度も呼ぶ声も遠のいていき、携帯が床に落ちた小さな音を最後に私は意識を失いました。(第1部終了)